春雨

九

哥と詞を若くまゝ

[V. 12]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 12
copy 1
Asian
Japan
Cage

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源氏廿五の三月より後の年まで

世中いとつづらしくうしろまさことのこま
されば（源ん）をめてしらぬどがかなかりへても見（これ）よりまさ
なこともやとおぼしたりぬがれ次まは苦（むし）とそ
人のすそかなどもありかれいまはいと里（さと）がるれ心
すごくておまれ家（いへ）ざる稀（まれ）はちどもくるへど人
しげくひしつけうらんすまかねもいとほいたすかるべ
しさりとて頼（こやこ）をと我ざうらんもふる里おぼほか
たりんべき我人ひろくぞ思しこぐらくよろづの
ことにしたる所来おもひけぐけぬふなかなし
ことといとさ海ぐるりうつる拘とおもひとて
つる世もいまはすそくるれるんことをおぼすまも

いと狭(すそ)がこさことおぼりる中にも姫(紫)君のあ幸
くれにそへてもおひたげさまへる夜の心ぐるし
さはなるにとにもしたぐれて衰なるを汁めぐりて
もまろあひえんことをうるらずとおぼさんにてぶる
程一二日の程よそくにありしくらすおりくぶる
おぼつるまさ物におぼし妙(紫)君も心ぼそうのこおもふ
まへるをいくとせそれ程と限(かぎり)あるうちにもあらず
あふをかぎりにへぐらりゆくんもさぶめるさ世に
やがて行るべきかどでにもやといこじうおぼし
まへばおのびてもろともにもやとおぼしよるおり
あれどさる心ぼそうん海(うみ)げらのなみ風よりかかに

しちまじ女人もちまりしんまうくらしてきれさ海
まてひきぐしのへしんもいとつきるくわが心まを
中く抱きひのつまちまうべき代なぞおぼしゝ人を
を女(紫)君はいうじゝらん道(こち)まをくれきてずぐる
あらばとともむやてうしめしげまおぼいたりゝれ
茶ちる里まもおりしゝふことゝそまれなれ。さて
ろぼそく衣なるれ有様をこれ(源)れけげまうれてもの
しのへばいうじうなげきおぼしゝるさ海いと
ことりなりぬ(地)代ざりまてもほのくまえてまつり
まひのまひし所ぐ人志れぬ心をくぐきのふ人ぞ
おほかりけるへ道の(まうぐう)夜(なつかを云也)よりも抱の罪しやまるいかぐ

とりなすされんと我れたあひしくましくれど思ひ
いたれとつくひつれはありむかしかやうはあひ
おぼしおもれをもこせ給はましかばとうち思ひ出
給はさもさ由ぐは心をのこつくせんべかりけるへの
れ熱(らざり)かれとつくう思ひさそしまふ三月ゝ川かあ
まりれほどはるんこやことなれ給けるへはいま
としも思ひせまゝずこぶいとちかう川かうまつり
なれたるかぎり七八人ばかりれともまていとかす
りまて出たち給ざるべき前ぐはれ文斗(ざり)ひぎとなら
ずうち志のびましはも衣と志のぐる斗かきし川
くしまへるはそどころもまゝあべかりしかど其(その)ありの

ぬちのまぐれまぐれまぐくもくをうず姫は
なり二（源）三日ありて（左大臣）おほいとのは東はうへにてはる
はるの海へりおびろ車のうちやつれさるは女の
やうにてくろくろへいりぬもいとあたれは夏と
のこおぼゆ（源）ぬかるいとさびしげにおれたるこころち
して（夕霧）ひろ君のれめれとぐをむりしさひしし
人の中は海へでちらぬかぎりぐいりぬへるを
めづらしがり男そてもまうのぼりつどひてこそてま
つるつけてもいとはもれぬうくらぬいきに人ぐ
さん世のつねなきせひきられて涙はんれたりぬ（夕）
君はいとうけんしきてぞれそしはおりしりぬさ（源討）

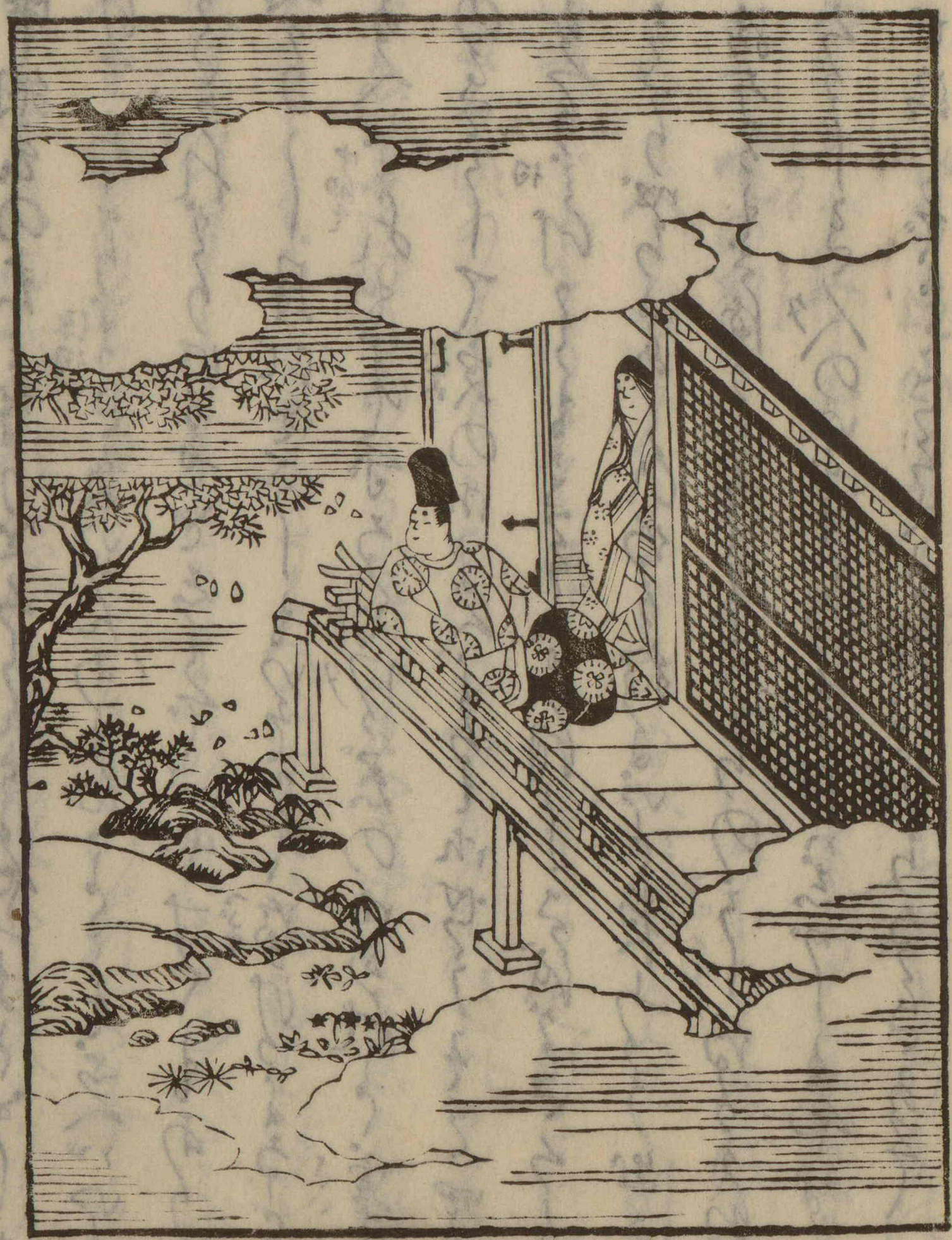
志き程に忘れぬとて衣なれとて、ひざまづ人給
へるれけしき思がるげなりおとゞ（左右）こゝろにはかり
なてしいめしなりづれ（左右詞）ぐりこゝろせなへん
ほどおまゝと侍ぬ昔抱語もまいりきそこそ
さきんと思ふれど男のやまひなきこゝより、御
やけまもつかうまつらずくらねをもへしこそま
つりて侍るにつゝくしざ海にはこしのべてなど、
もれてきてひがくしかるべきは今は世中
はぐうるべき男にも侍れどいちはやき世のいと
おそろしう侍なりかゝるれこと紙こゝまゝかゝり
つけて命なるがきはこゝろうくおもふしまへらる。

世の業にも係られおのづからしばし書なり
みずしてもぜ給よしざりし日あり後をこそまとめ
ればよろびいとおぢざさあすなんと覚えなくていかで
きほされ給ともおのこともさらにその世の
むかひまして給はすればひとまでゆけどもさらにいは
りこの書ことりはすん給はざるしてつく友爵（えんさく）をと
られどもおさくるゝことはなかりつゞけてつゞきは書
やけのりこまりあまた人のぶりしぶ後にて世中
まありあつだどもかきりざま人の国にもし給
なるとどもくさるもちつゝすべきさびめなども
給ふたまふわざ後しとあまつくまあるべきまこそ

偽なれば、ぞりなき心にまかせて、つれなくすぐし
偽らんも、いとくちぐうりおほくこれよりおほきなる
ちぢくのぞまぬさきに世をのがれなんとおもふ
あへしちぬるなど、こ夜やうにきそく給、むり（度合）しのれ
抱讃院（ぐりぬん）のれことおぼしの給はせしれ心ぞ人など
ぞ出あてれる紙しの袖も引ちるちあちぬる
（涼）去も元心づくもまてるしあはず、ワ（タ）ぞのなる
ごろなくまぎれありきてこれかれにあれきそ
あ紙、いらじとおぼしたり（左河）過偽なし人（菱）を世におもふ
しまへ口すくせなくのこ今にうるしひとぐる紙
これはことなるんにもし偽る世ならましりば、いか

やうなせひなげきは侍るまし。よくぞこじかくて。
くる夢をこそ女はけるとおもふこまへなぐさめ
侍るおさなく抱しの後かくよくひ過ぬる中は
とぐまりもてなげさひこさてゐ月日やへぐり給
んと。せひのふる後なんよろげのことよるもかれ
しう侍るいまし人の人も。海ことはおかしまとまて
しもかうことはあらざりけり。給さるべきまて。
人のみかどはもかうたぐひおほく侍るまされど
かひ出ふしありてこそ。さうことも侍れ。とき海
かうざ海は。せひ給よろんかうなるくなんなすど。おほく
のれ抱鑑ゐてゐて給。こ位中ね（私中ね）もまいりあひもて。おほ

ちきなどまつりぬる。東ふけぬれバとまりぬて。
人ぐれ前にさふらせぬて。抱譲るどきさせ給。人
よりハげにこよるうしびおぼして。中納云（葵のくりん女こ）の君。いへど
えにかるしうしへるさ内を。人（添ん）しれど衣とおぼして。
人これしげまりぬるにとりつきてうらひ給。是（地）に
よりとまりぬへるあるべし。明（添）ぬれバ東ふうう出
給に。有明の月いとおしう。茶のまどとやうく
さりゐて。ひづるる事陰（げ）のいとおもしろき。庭に
うすく霧（きり）つりたるそこつくしあひて。
秋の夜のあそれにおぼくしちまされり。すこのま
のうらんにせしうるとてどうりるがめ給



中納言の君こそまさりとくんとうや。うまどもしあ
けておもり。（源詞）まろとゑいめんわたらんこそ。さへば、いとゝ
うとそれがりけるせとおもひて。心やすくもありぬ
べかりし月ごろとぞしもいそがそ（つぞ）侮けるよるぞの（さいしやう）
めのとが。（中納言を）おもしも男子あまたな。（夕）うかの君の御めのと。宰相
の君もしてて（大宮）宮の御まへよるも御せうそこ男し
まゐり。（詞）かけしもこそしまゐりしき。さぶかきくふ寸
こそかぶり。ゆめ心物う給ふかと。来たり出させ
給ふもさ侮り、るとちのとこ給ふ御心
なかしきゝ（夕）人のいかどきゐする御は志ゞしもやすから
せ給うてでらいさわらしのまれば（源）うちあまさきのなて

鳥辺山もえし煙もまがふやとあまの塩
やくうらみにぞゆくれくへしともおもふくうらず
およそ暁の別はかうのみやは心づくしなるおもひしり
たまへる人もあらんかしとの給へばいつとても別と
いふもじこそうたてはべるなる中にもけさは猶
たぐひあるまじう思ひたまへらるゝ程とある
ごゑにそげるあさうらず聞えまほし
きこともかへすがへす思ひたまへながらむすぼゝれ
侍る程をしはかりたまへらばいぶせさへ悩
へんまつけても中くうき世のがれがたうおもひ
おもへられめべられば心づよくなりまへりて

いそぎまゐで給とさそて給出ゐ程を人ごゝ乃
ぞきそこそまゐる。へぐるの月いとあつさまいと
どなる海めしうきまゐらまて。地をおぼひたる海と
らあ用ゐこぶまもるまさめべしまして いそけなく
おくせし程より。こゝそまつりそめてし人ごゝなれば
さとしへるまされありさ海をいうじとせふまことや
れれゝへし
大家
なまさ人のられやいとぐへぐくん 燭となり
し雲ゐるしでハ。源 とりそへて 衰のこつさを源出
給ぬ。ゆくしこさまでなまさあつり。源 とのよかり
されば。ワぐれゝるの人ごもまどろまぐりけり字也

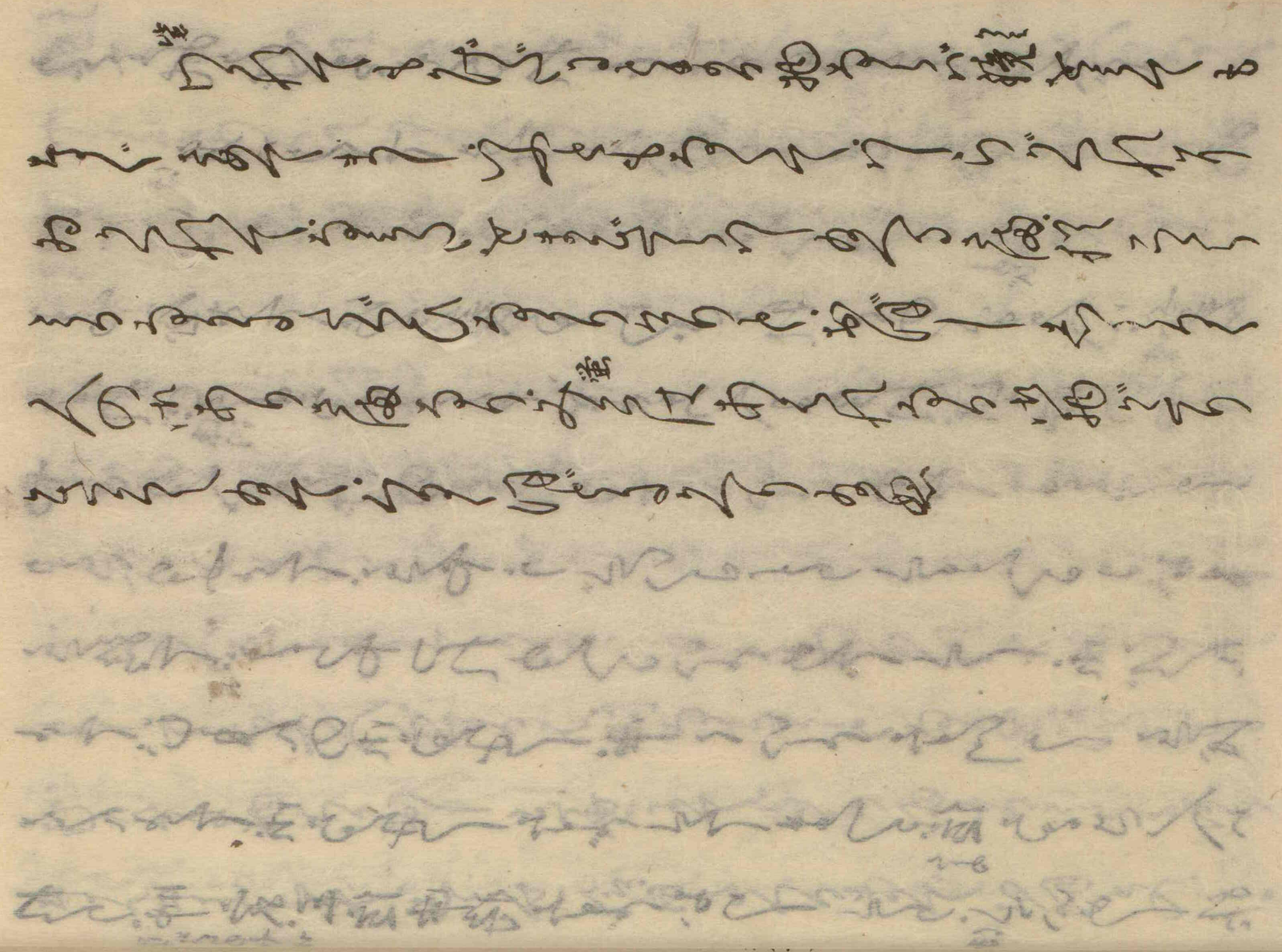
まて。所ぐまむれぬておきましとの三世をしる
そしきるりさふしひまはしたしうけうまつる
うざりハ此ともまつるべき心まうけしてけた
うしの別おしむほどまやへめもなしさぬ人ハ
とふらひまつるもをもきさぶめあるもげづらりしさ
ことまされバ所さく法どひし馬車のくさもなく
さびしきる。世(深ん)ハうさ和なりなりとおぼしたる。
ぶいたんなどもかくへそちりだこて。こくみ所ご
ひきうへしたり。こうほどぶるかうまして いかる
あれゆんとおぼして。和(紫)のこいまけうりあへれだ。
こかうしもまつてぞ。なぶ(紫ノ)めあるし給れば。すれ(深ん)こ

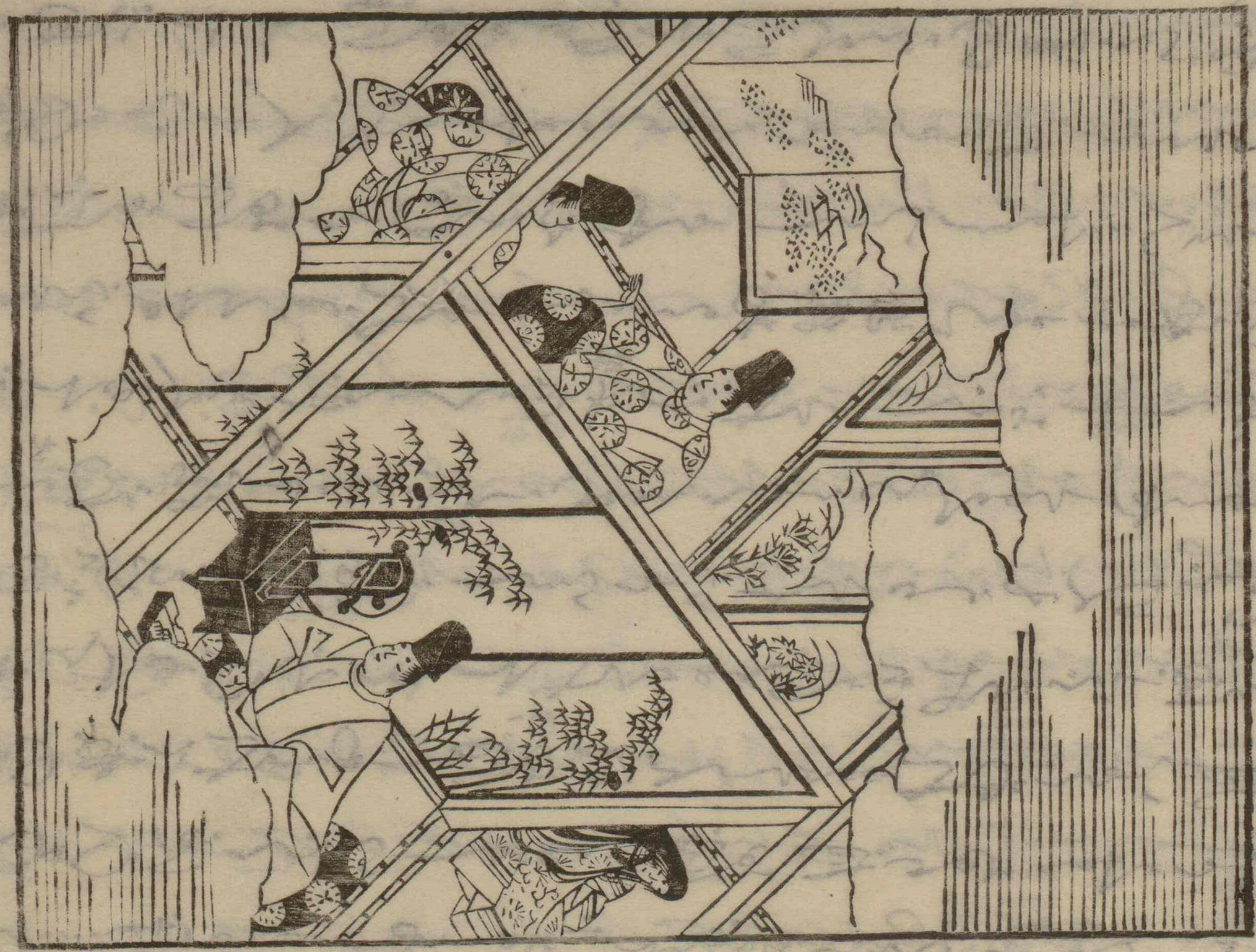
などまつりきつゝへ。前ぐまゝしていまぞおさ
さもぐどれぬすぐこどもおかしうて。出いりをこう給
まも心ぼそう。年月へぞ。うろ人ぐも。えしもまと
もそぐやゆきちらむなど。さしもあるまじきとき
へ。れめれミとまるもやり。よべ（深詞）はしりくして東ゆけ
ましうばるん。例のせもずるさ海まやおぼしるし
けるうくて。侍ほどぐる。れめがれずとおもふを。うく
世をもるるくさはまは。うろぐるしきことの。を乃
げうしおほうりける。ひこやごもりまてやはつね
るるき世に。人にもなきけるるき地と。心をれもてんも。
いとおしうてるんと。思ひ。なんぞ。（紫詞）うるる世を見て

ありがまぜもすぎるまことはなまごとまことばりの
なていうにとあばしへうさ後人よりことなるを
ことなりぞうしらく（并ア）ゑうはいとをろうまて（紫ノ源二）まと
ありあばしつきまけりまましてせの罪をわづら
もしがりてをとづれきそゝ給もずれとゝひり
ざまつり給もぬ代人（紫ハ）のこうしんことももげうし
く呼く志られしてもうてやこるましをまく母
の小のうちなどのせまにもうるりしさいもいのあは
しさあかゆくしやせふ人ごうぐまつけて
つれ給人れとのまひける代さうしよりありて
（紫ノ）ゆりしさ給まもいうじう心うけ稀ぞこれよりも

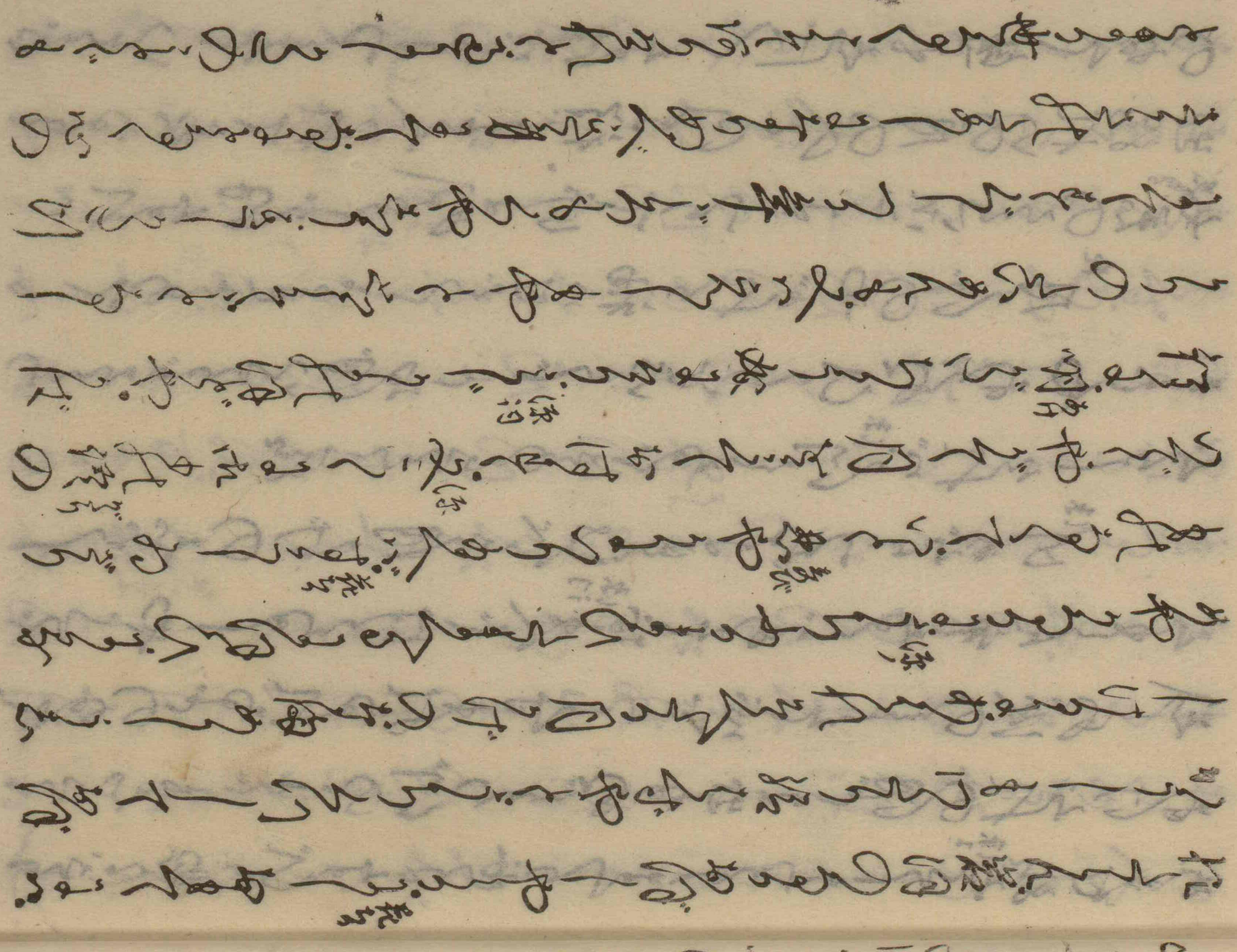
え絶てをとづれもきこえず又これよりしきんもなく。
げまゞおもハれるかれけりさ候るか。拾世るゆかされ（源内）
ぐらうて年月をへバ岩田の中まで（法と）むへしこそ
まつんさて今ハひとこくのいとつきなすべん
きみより。御田やけまうしつまり実ゆかひとハおこさ
らきるか月日れけげとぶるにハずやすらるまとかう
まかしもいかつまおもきるかり。おやまちなれ
がさのべきまこそうらことをおめれと思かり。
まりてらかへぐするを倒るきことなるを。ひとこともなう
ひさゝる抱くらるかりし世まそくらゆ語こともなう
なんなどかなきせ給田とらうまで御田とめでたし。

れり。帥家（蛋そちのやは）三位中将などおりしたりしこいめし給
たんとてはなをしたまどしてまつる。位（くゐ）なきさんは
とてむもんのはなをし。中くいとなりしき後
き給てうちやつれのくるいとめでたし。はびれ
うきのふとてこきやうどいるよりしまへるまおも
やをのへるけのぶれるがらいとあてまきよう
なれば。（源討）こよなうしてをとろへまなれ。ひけのやう
すや屋をて給ふ。衣るるつぎられとのしまへば。（業）
洞（ほらぐ）をひとめうきてこをせのくるいと思（おび）がくし
（源）身はうくてさすしへめとも思がおたりさしめ
うどれけまたるれじ。とこそしのへど





(添ム)学ちる星のこころはぞげるおぼしてつねる
ほとゝし給ひとゝとゝりまてかれ人もいまひと
しとびこゝずしつゝしとやむとむとおぼさばそ
の夜もまゝ出給ひしともれうゝていこう
かしておとしられば(篆)安れかくかどまへおて立
よせしまへることゝよろしびこゝて給ふ(地)
けゞけんもうるさしいといこじう心ぼそきれあり
海しぐれれかげるかくれてどぐひおへる年
月いとゞあれまさらん程(添ノ)おぼしやれて後の内
いとうすゝなり月おぼろまさしいでゝ池ひろく
山こぶりさいてり心ぼそげまこゆるまもすこしか



のなて鳥もしばくなけばよるつこそいそぎ
出給れいの月のへたける程よそへられて哀なり。
女君(若ちう)のうきれぞるうつりてげよぬるくがほなれば
月(花)かげのやどれる袖はせぐくとともとめても
こゝやあるぬひりをいうじとおぼいたるがそろ
ぐるしかれば(源)かげしなぐさめこそ給
(源)りめぐりつゐるまもしべき月かげのしぐし
しもしん中なくがめそなまへ(源討)ぐはるしやらぐ
しぬ波のこゝそ心をくらすまれなれなどのなて。
あけぐれの月ぐまぬすめぐろげのことぐもしてて
めさせ給(源ニ)しうつうまつり世なすびうぬかぐり

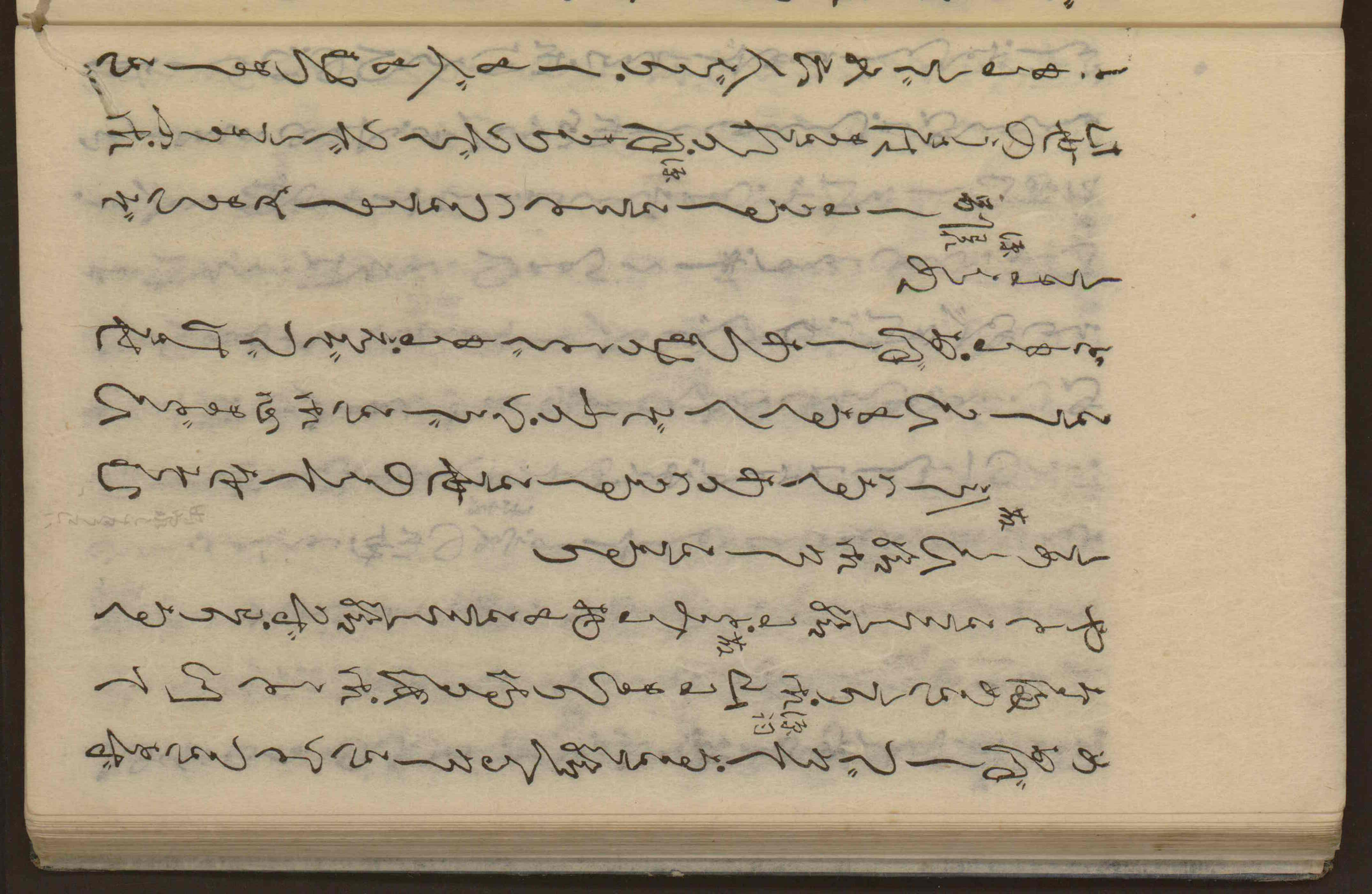
のんごとのことゝとりをとなふべきかゝしこと
さゞめをうせ給ひしともまゐるがひ望ゆうかぎりは
まるこえり出たまへり。かれ山里のれすみかは。くは
えさうぎとりつゝひのべき抱どもことさらまよそひ
もるくことそぞて。まるさうべきふことども文集(ぶんぢふ)など
いれたりたこさてとも琴(きん)ひとりぞもせ給。取をさき
れでうど。花やかるゝれよそひたまどさらまぐし給
もぎおやしの山がりめきてもてなし給さふふ
人ごよりちじめ。よろづのことこれ(笠)ましのこいり
をそしつゝしのふ。ぞやうじ給こまやう。みまのき
よりさうじめて。さうべき前ごの券(かん)たまどこれとて

まつりをきこゑ給ふ。それよりも和のこゝろまち。おさめ
どのなどいふことまで。か細云をとゞかぐしき抱
まことをきこしまへれば。しろしき家司（けいし）どもぐして。
しろしめすべきき夜どものゆひあげく。ウ（源）がれる
の中務（づかさ）。中将などやうの人ぐ。つれなきれまて
なしなぐらこゝてまいる程こそなぐさめつれなる
ごとなつけてしとしへども。いのち（源詞）ありて二れ世ま又
久るやうもあんなを。泊つけんと思ちん人を。こゝか
こまさふらへとのゆひて。からしもこれまうのぼら
をゆて。さるべき抱どもしれぐくだらせゆふ。ウ（タ）
君のれめれとこち。それちる里などまも。かりしき

さ夜のいさりもれにてまかめくしきさすちにおぼし
ようめことなし。内侍（勝）のうえのれもとにぴり（源）なく
してこそ給ひ（久ノ詞）ともせ給ひもことりにしひぬへ
ながら。今ゝと世代せふぬへたべる程のうさもつら
さもこぶひなきことにてこそ侍れ
あふせなきなさぶ（源）の河にしげうしやながなく
こ和のたゞめ成けんとしぬへいづりのこなん。つこ乃
がれがうう侍けり。道のほどもあやうれば。こ夜
りるいてそし給ひず。如（勝）いというじうおぼしめて。
志のびぬへど。此袖よりあまりも取せくなん
なさぶ（勝）河うふこなたも消めべしなまれて

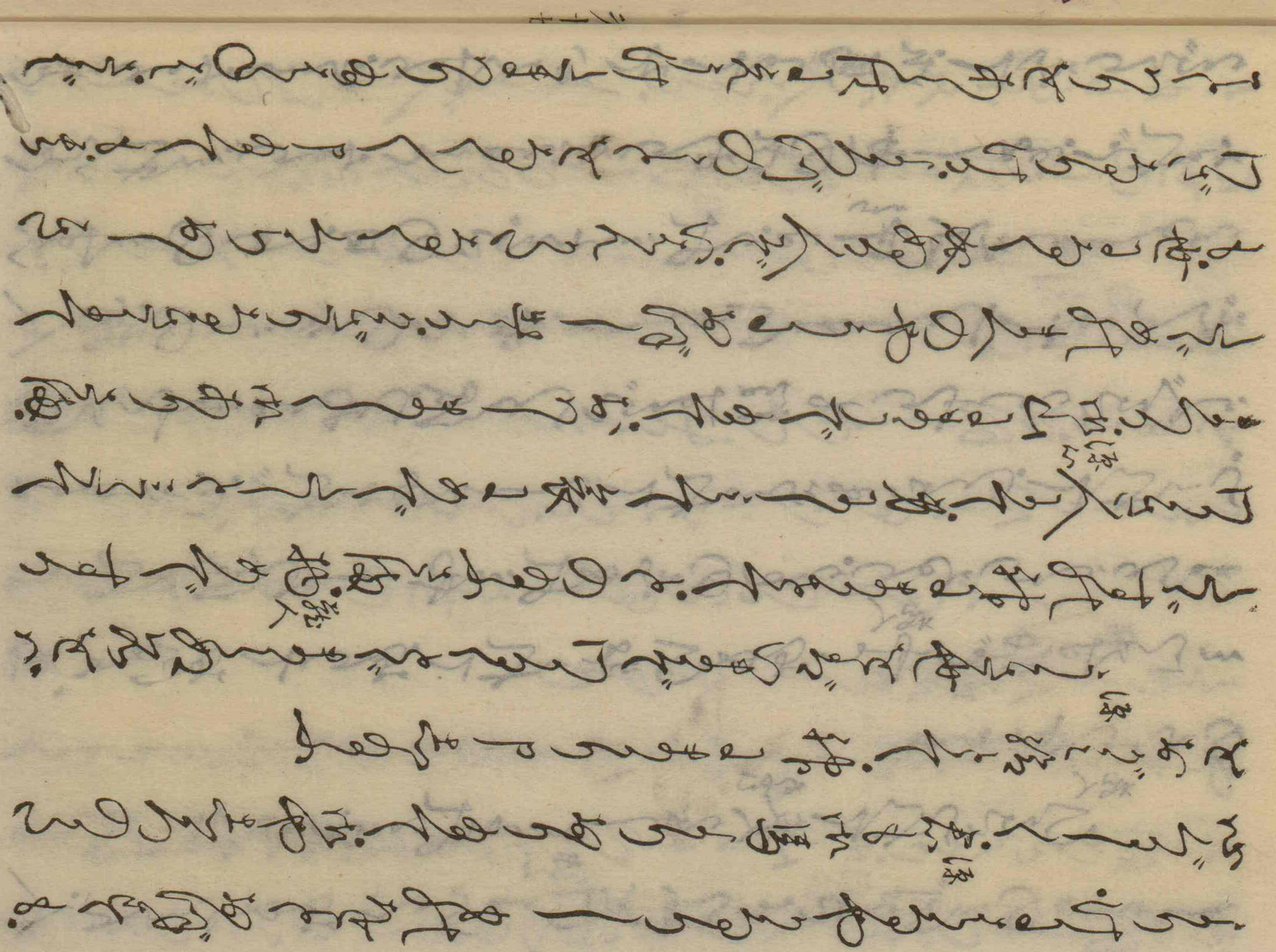
後の瀬(せ)ともまたずてはかなくなりにきあはれ
てひとおりしけるり。源(げん)ひとさびらいめるくてや
とおぼえていたましきおもしろけれど。おぼしいれて
うしとおぼしたまふ。ゆかりおぼしくて。おぼろげなるう
すゑはへはいとあはすちかも学し給ひするらめ。おほさ
とその蕃まへ院のれもおかおぼこしてまかり給とて。
さる山へまうで給。暁(あかつき)りけて月出けるれば。まいげ
入道(君)のこゝやにまうで給ちうきこゑすのまへにおまし
まりて流(源)ありつるこゑしき給。表(ひょう)のれことば
いらじくうきろめるさ抱まで学し給。地くるこゑり
心ゆくきいとゞちの此抱給なるは。ちありけりの哀満さりけん

りしなつしうめでたきれけるひのむりしけ
うちしぬよつらりしれ心ぢんもうすめこそさ
せ雨ほしそれどいまさらようそてとおぼさるべし
源 門がれころまも中くいまひとさはえぐれま
さりぬべそれがのんじんへして源詞 ぐくおもひけ
ぬつうまあらりたべるもおもふまへあはすか
ことの一ふしまたすん重おそこしう侍りおしげ
なきかはなきなしても 長家 家のれ世まぐまことか
くおもしまきがとのこ字し給ぞことりなるや 花心 家
もえれおぼしまうくことましあれば心のこう
ぞきて字をやつを給ちず 源 大将よろづのとうさあつ



めぬばしつゞかてなき給へるかしきいとつきせず
なほめきたり。此山（源詞）まゐり侍る紙にと聞て
やとしきて給ふ。とみ（苑）に抱もきて給ふ。ぎりなく
しめしひ給れかしきなり
（苑）うしいなくあるいかるしき世のうてをそむ
きしかひもなくくぞふる。いうじきれ心まどひ
どもなぬばしあつむかことゞもなえぞつゞけき世
しまきらぬ
（源氏）男しまうるしきことにつきましをまるぞ
山世のうさはまきれる。月（源）まちいでくいでしまふれ
しもなしゞ女六人だり。しもべもむつましき

かぎりしてれ馬にてぞおもすらさらなること
なれどまし世のれありきることなりこれいと
かるしうしふ中(うち)ま・かれこえこぎの日・かりのこずい
ぞんまてづかうまいりし・右をのぞうの義人
うべきかうかりも程すぎつる紙・つゐるこふぐけ
づられて・つきもとられてりしなかれば・れともま
まいりうちなりかものしもれこやしろ紙・かれと
こいて寸ほど・ふと(義人)おもひ出られて・おりておほん馬
のうちをとる
ひきつれて(義人)葵(あまひ)かぎしくそれかこをさんぼいら
しかものこいがきといふをげる(涼ん)いかぐおもふらん・人



(添)あけくつる行ようてあひて恵実まもれせうそうこさ
そし給王命婦を(右ノ)れかくりとてこゝろくせのへバそ乃
つぼのまとてがふ(又句)るん都とられ侍る文まつり侍ず姫
めるなんおまるのうれへまきりてせふこまへられ
侍るよろづとしとうりてけいしこまへ
(添)いひかまる恵の都の宮をうんとさうしるへる
山がりまして桜のちりすさうる枝につけのへりうく
なんとれうんぜさすれバ(恵実)おさるまきれ心ちまもまめ
ぶちておりします(命婦)れ也いかゞ申れし侍らんとけい
まれバ(恵実詞)しこめぶる迄しきまれをどとくな
ましていうまといへしとのまもすまれとられの

はかりやと衰(命心)まことそまつるおぢきるれこと
まれ心をくぶきぬひし。昔のことおりくのは有
さ面ちひつゞけるくまも。地ちひるくて。ゆれも人も
すゞしぬつべかりけるせば。心と覚しなけきなるを。
くやしう我心ひとりまうこんことのやうまぞ
おぼゆるは色ハさらま(多ノ内)罪しさせや里侍ぞ。おまへま
くけいし侍ぬ心ぼそげまおぼしめしたる出気女
もいこじうるんとぞこ(地)いとなくこころのこぐ袖
けるるべし
さきてとくちるいうそれどり去ハ茶の都と
さらかうこんどこさしあしぐときてて。名称も

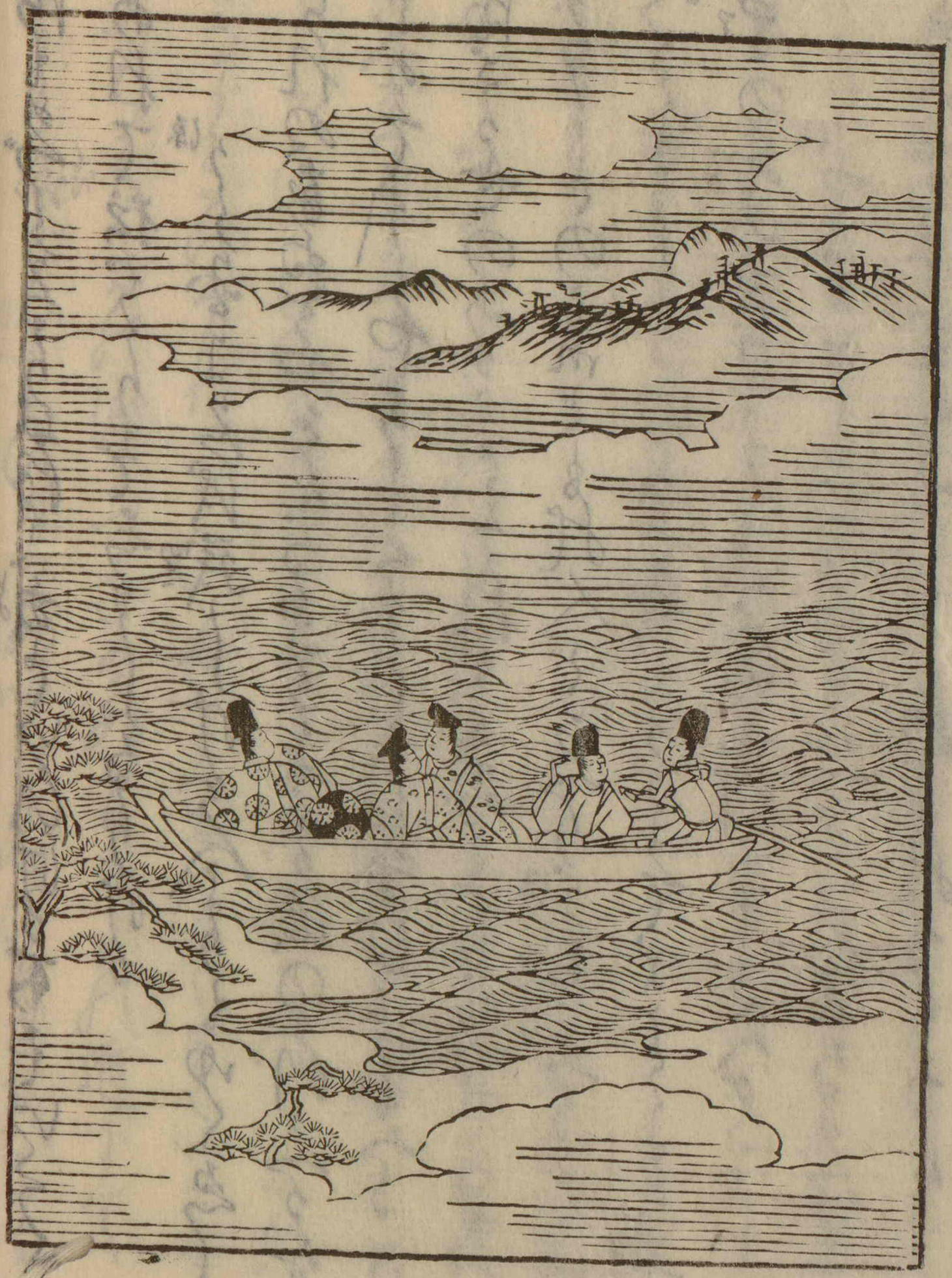
とくとよろこゝぬやハありしやんごとなきさん
ごちめ弁（でん）殿（ぐん）などの中にもおほうゝそれより志ゝは
ゝずさしゝずさしゝぬまはあしるどさしあたりては
いちはやき世ばさしたゞうりてまいりよかんもなし
世ゆとりておしこきてさしたゝまはおほやけをそし
まうしこなれど身をすてくとゝひまいらん
まもるまのかひかもとおもふまやうかなりハ人（涼ん）
けろくうしめしさ人おほく世中ハあぢさるさ抱
うるとのゝごよろづまつけておぼしてこ日ハ女君（雲）は
此地經のどうよこさうしてゝしかして例の更ふか
くさ給ふりのれぞなどしたびのれよそひいさく

やうしまして月（源詞）出るそりまち紙をそしいぞ
そぐるをそりまへしいかるまきまべきとれ
ほくいまりまそりとのこおぼしんとすしん一日二日
ふ夜さうまへぐいるありぐるおやまういぶきき
ぜうすう物をとてこすまきあげていのるま
いぎるひ罪しまへば女（装）ちまきまづこまへるこあしひ
てねぎりいでまへる月かげいうじうおかげまて
ねまへり（源詞）ぢが身かくてそうるまき世をまられすが
いかるまさ海まさすしん給えんとうしろめる
くかるしそれとおぼしいりしるがいとぐ志
うりべそれが

いけるものわれをしらでちぎりけくいの
ちは人まちぎりけるかれぞうるしまぞおきも
うるまでしなししまんぞ

あしかしぬ命まうへてめれまへの見られを
しだしとじめてしがれげ（源詞）まさぞおぼさるんと
いとこすてぐるかれどおけそてるばそしこるる
なべきるよりいそぎいでなひぬ道（こち）すがら面（源ん）がげる
つとそひてむすもうこぐりうるがら此舟まのりなぬ
日るがきれたれバどひかぜさへそひてまぐさる
の時ぐらまがれ海まつきなぬがりそめれ道まて
もがろ接（ぎ）とるしひなくぬゆちまぬぼそさもなし

ちもめづらかなりおほし(どの)要といひけり所もいとく
あれて松ばかりぞしるしなりけり
(源)うらなほ名殘(のこ)しけり人よりもゆく思し
られぬ事ぬるやをんなぎさなよう波のかへるを
こゝにてうらやましくもとうちずむじゐへるさ
ぬさう世のふることなれどもめづらしくきくなれ。
かなしとのこれとも此人ぐさへりうち(源)かへりこゝ給
へるまこしかこの山ハ霞(かすこ)もうかまてまことに三千(ぜん)
里(里)の和(かう)の心ちするまかひのしげくもしへぐらし
(源)ふり里をこれのみすこハへぐこれどなるがむな
更ハあるじ雲ぬかづらかくぬもれなくなん

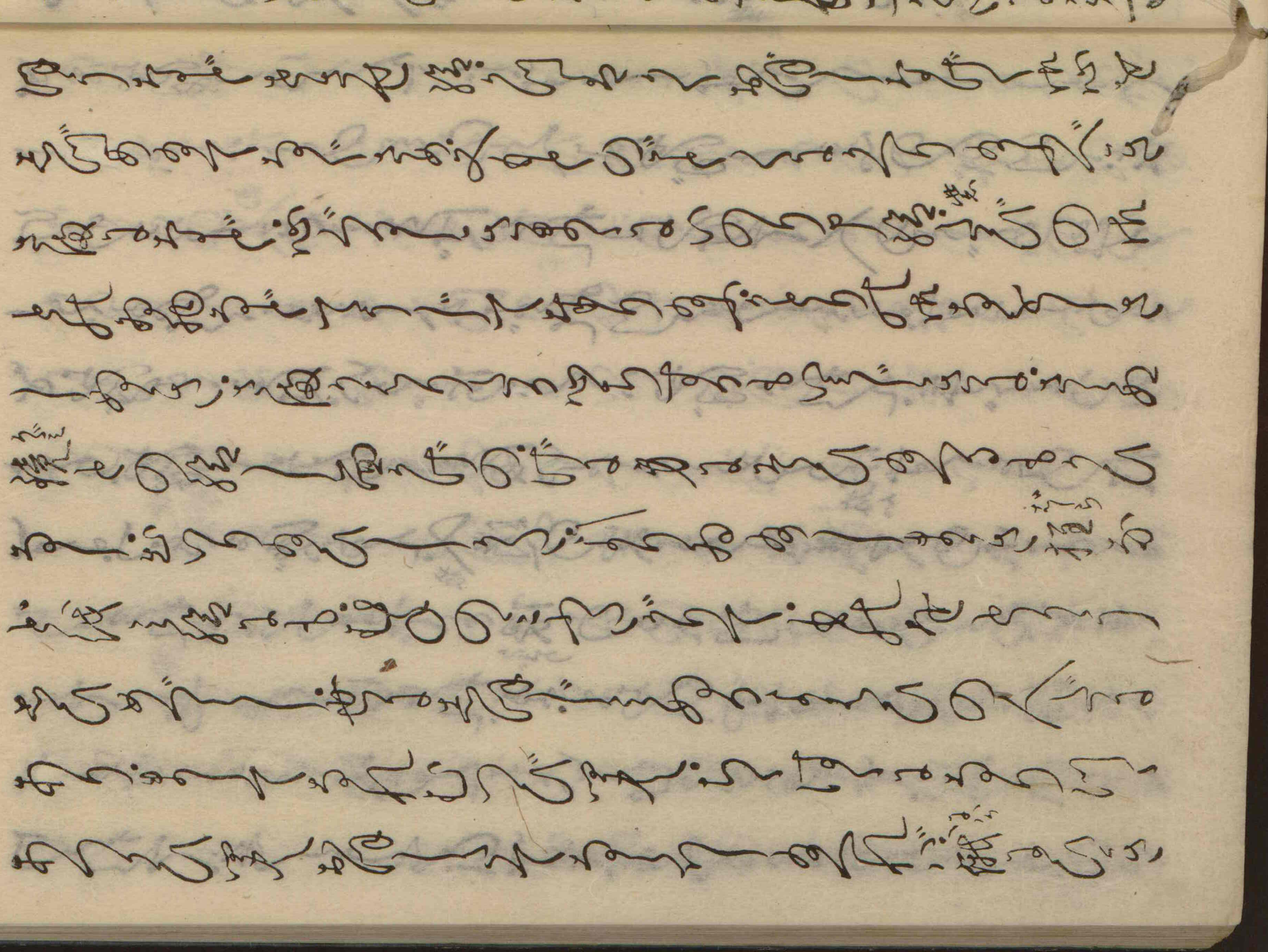


おたすべき所ハゆきひらの中納てのも塩(おか)これ
けるまびけり家(いへ)居(ぬ)ちりきけり女々り海けら
もやゝいりて衣まころすぐげるり山中なり
頂(うき)のき海よりもじめてめづらかまことまふかや屋
どもあしふけらうめくやなどおかしうしけ
らひるましたり所まつけられすまねやうがハ
まてうゝ家ありなまぐはおかしうもありる海
しとむかしのれころのすきひおぼしいけ
ちりき所ぐの見さうのつきめしてさるべきこと
どもなどよしらさよれ朝(あそん)下などしてしきけいし
まて御をとるふも衣なり時のまゝいとゝ所なり

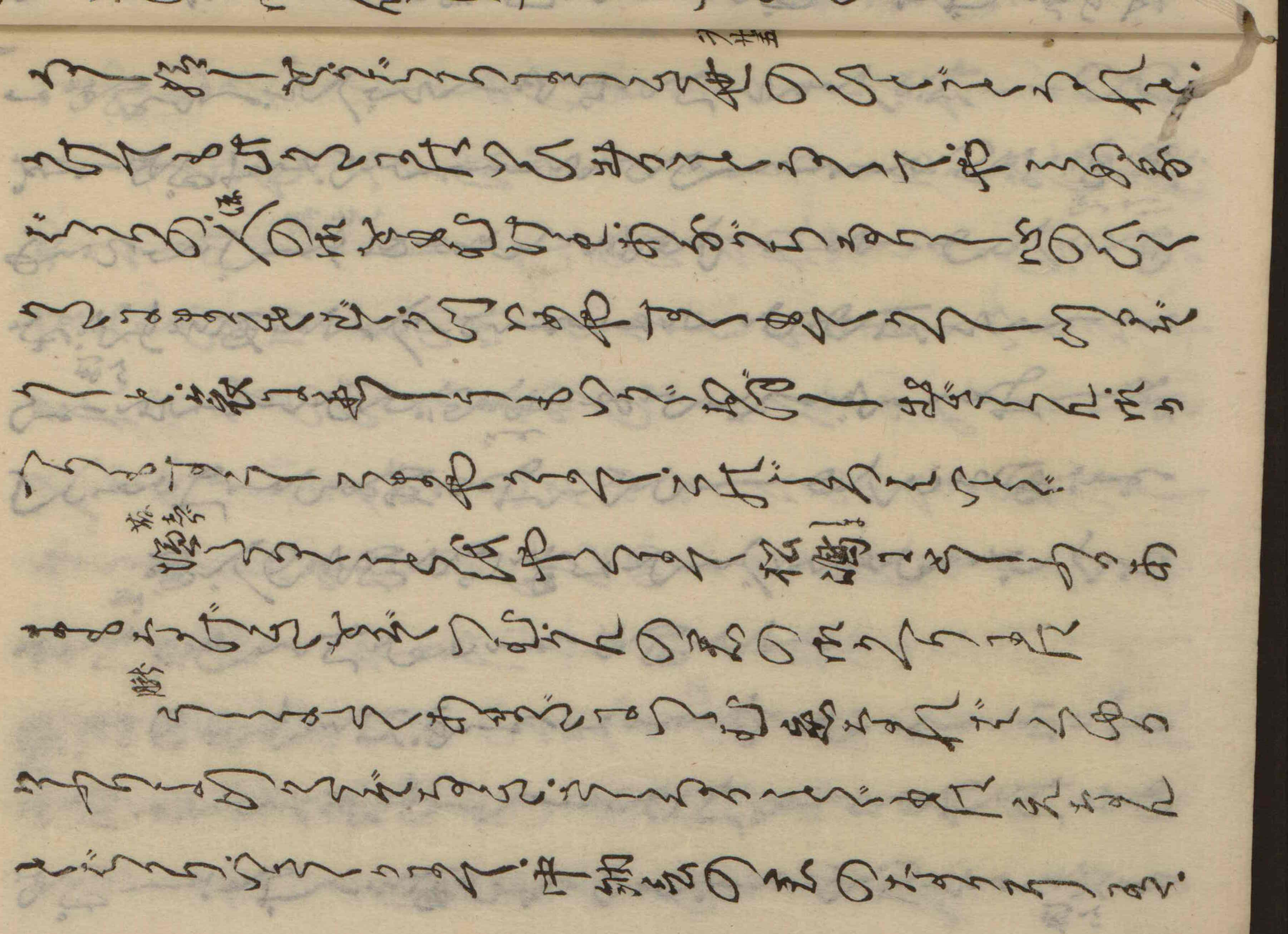
てしれさせ給水ふうやアとるし。うへ木だなどし
て。今ハとしげまり給心ちうつるるらず。くるのこゝも
しこしこさとの人なれば。思ひて心よをひかうまつる。
（源ん）りゝ振どころともなく人さはがしけれども。たゞぐ
しくもれなもの給あるすべきへしなれば。
しらぬ雲の心ちして。いとむもれいくいかで年
月をすぐさ海しとおぼしやらやうくことし
げまりゆくは。ちすぐ海のれまるりて。京のことぐも
おぼしやらくは。遠しきへおほく。女（雲）の笑し
うりしさ海。雲宮のゆゝと。ウ（タ）ゞ雲のるまに心もるく。
まゝざれおしなどをうじめ。こゝうしておもひやア

ゆくなふ家へ人出しとて給。二葉院へとてまつり
なふと。へ道の家とは。かきもやらと給ちぶらさ
れなつり。うやまは
松しまれあまれとまやもいかるらんすまの
浦ぐ志得らるく比い川と侍らぬるよもうさし
くこゆくさ紀かきくらし。みぐはまさりてるん。内侍
のうえのれもとまれいの中納言の君のけこくし
ごとのやうなて。中なるよ。つれぐと通ましかる
のおもふしまへいでくるくまつけても
うりず海の浦のうろめもゆりしき紀志得やく
あまやいかぶおもふん。さ海ぐかきつくし給こと

のそせひやるべし。大（左大臣）とのにも。宰相（タノ）のめれとにも
つかうまつるべきことなどもかきつらす。京には
これはかことゝろぐまこゝ給つ。はゝろこゝぶれな
人ぐのこゝおほかり。二条院の君（紫）はそのまゝにおさ
もあづり給ひずつきをめさ海におぼしこがれど。
さふふ人ぐもこうし人（ひじ）佛つ。心ぼそうおもひあ
へり。まて（紫ん）なるしのしはでうどぐも。ひさなら
しまひしはとぬぎすてまへるはぞのにかひ
などにつけてもいまいと世にはなくなりたん人の
やうにのこゝおぼしたれば。かゝ川はゆゝしうてが沖云は
僧祇（そうづ）にはいのりのしなどきこゝ。二ゝにこゝず



ワれて。迄しうせひ望れまへることゝりあり。ひと
すゝ世にあるく成なんもいとむかゝるくて。いふひなさ
まてもやうく口まれ茅もおひやすゝん。さくほどハ
ちかれど。いつまでと限(かぎり)ありれ別にもあらぬを見
すまつきを須なん。入(なな)道の家よりも。無家のれことゝ
より。おぼしたげくさ海いとさゝなり。れ(なん)すくをの程
をおぼしまはいかゞ何さくハおぼされん。年ごろね
しごもれくきそしたどれ川まりしさますうしなさ
けあるやしきこゝをば。それにつけて人のとがめ出り
こともそとのこゝひとへにおぼし志のびゝ哀
をもおぼうれんじ。すうしすくしうもて



おぼしなげくさまなどいはんかたなくいひけり。源氏と
もひきこして絵かくしもあればかなしげなればあめ
雅楽のかみには心よくてまゐらうしけるり
ちかればおそれなすことにおぼして
御代のさかりむ袖まくらしべこころまちかぞへ
つかまつれるもおもひいろしのくるさまなど
ひこまゐるうら事もらうおぼしめし給
ねざめさまで今はとまゐるあはれにくし
ゆかしうづるすまゐにおもやかのてあるべき袖
とくおぼすならいじらちかうひさ西親
まおぼしてらんぐくせられてまへんが殺しのび

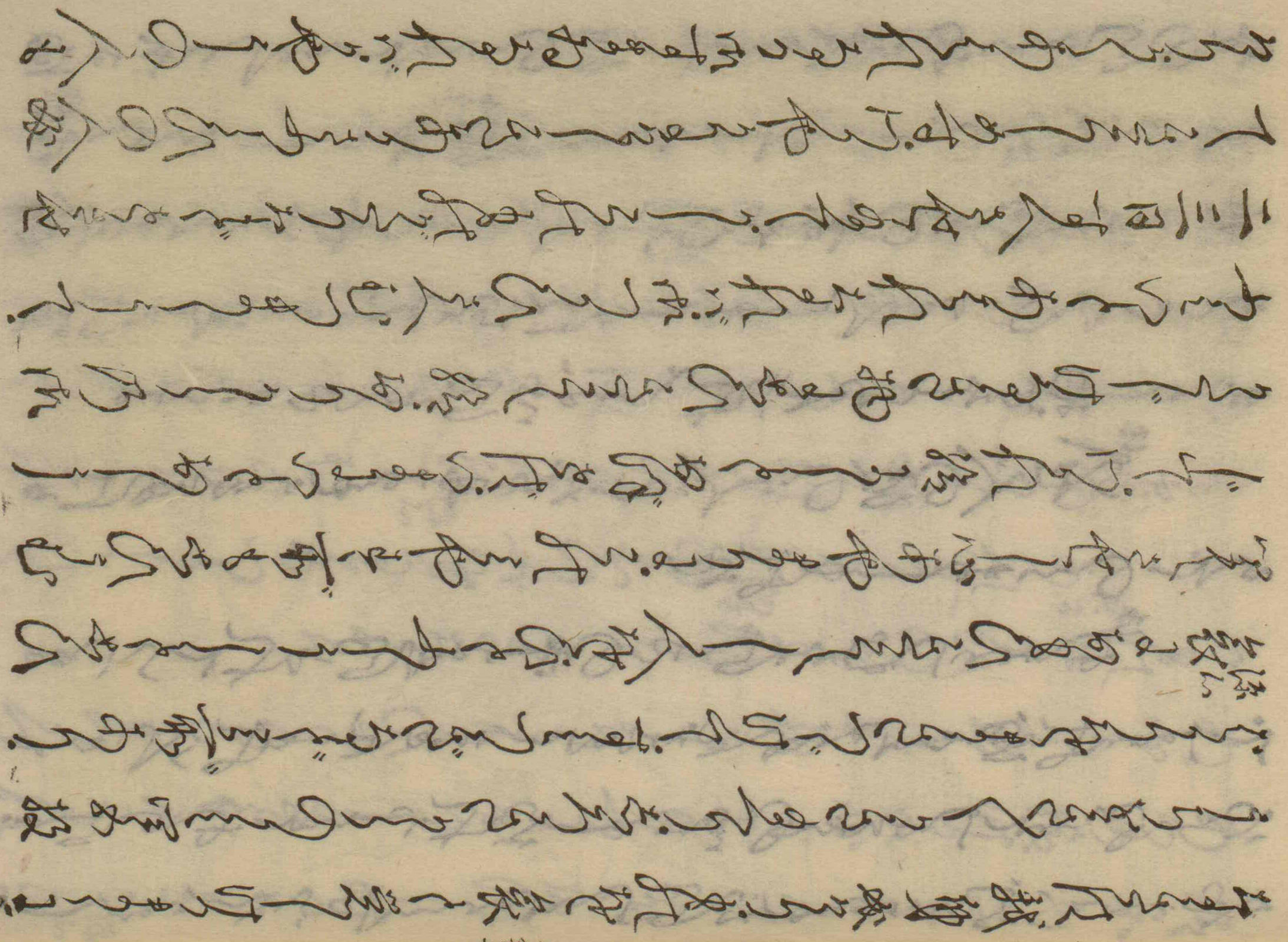
てやむ人まし とおぼしまるさうち人しるそや
くゝうき世まつ云低ぐまうしるそんとおぼしだ
やがて此さうじ（精をこ）まてあけくれとてなひてかい
す大とのゝ門ゞ君の此ことなどあるまもいとゞるし
それどをのゞりあひこそんこれまし世
人ゞ抱しまへいうしろめたうはあらずとおぼし
なさるゝは中ゝ気れ君のまどたれぬちぬまや
あらん海ことやさけがしかりし程のまぎれまあら
してぞりかれ伊勢の宮人も此（源）つゝひありかりかれ（此息不）
よりもかりそへこゞまのれりあさうらぬことゞま
うきまへり云の紫筆づゝひなどいゝ人よりこと

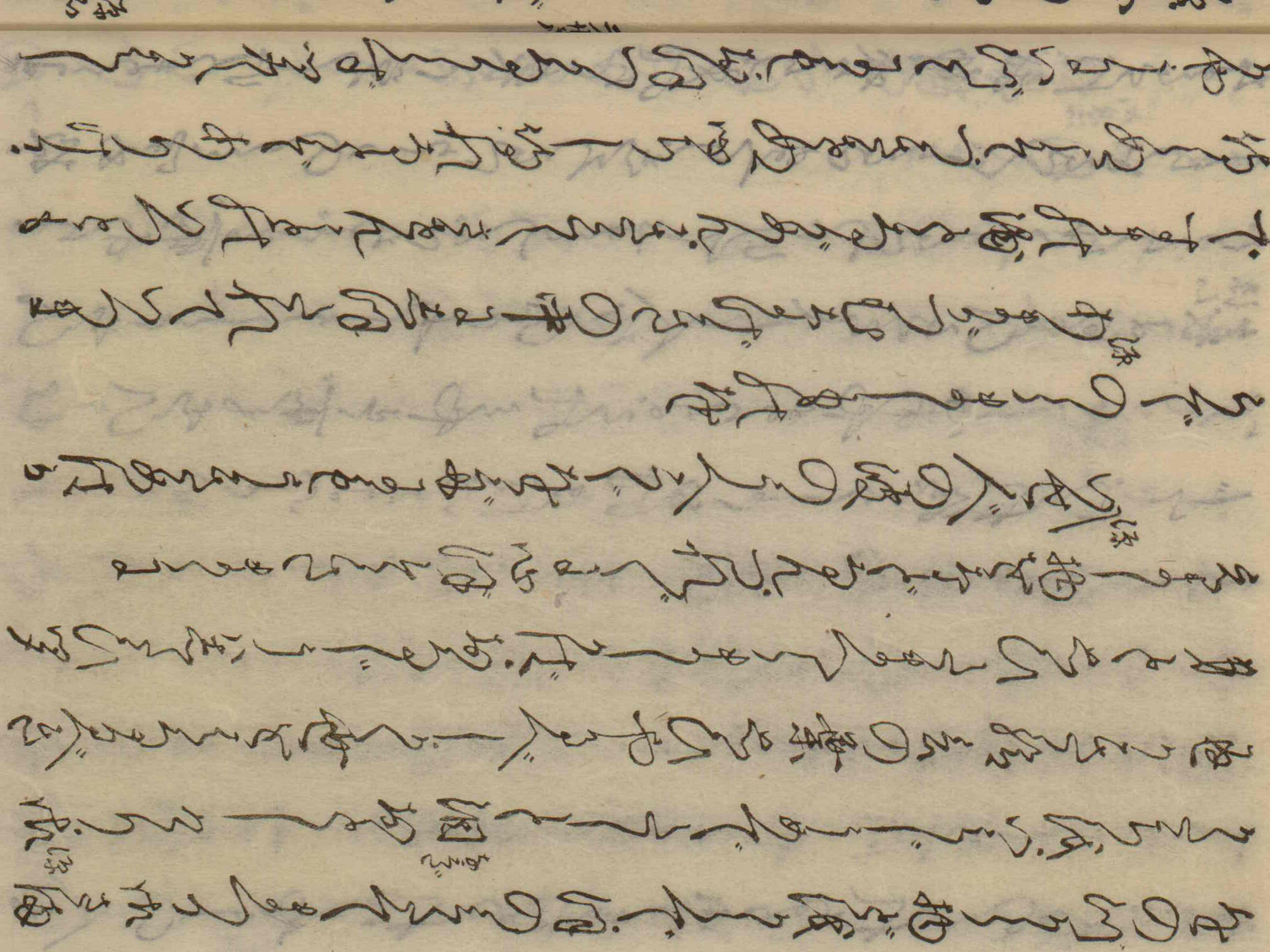
まちし夜のめくりかはりくるしかりにおはりつゝ
とはぬよをまつへきかきりあはれとはきけ給ふるも
明ぬ夜の心まよひのはてならぬさりとも色なき月こそ
つれなきにしもさしやりかへしきすなよもけにこ
わかさ身の心こそおしへしきみにとりもちかへりし
かはるべきこれ

寂蓮
うきためしめくりつい浜のあまはせしやみもなし
こゝろちかき夜のうらみてぞいかはよりかまつかま人
しぼりし世のありさまもおしはかりすくすべきなる
かしわまうかま

法皇御製
伊勢嶋やしほひのかたにあさりてもいふかひ

夕廿七





をのづから抱ど波りしで、ほのえてまつつれさ海
りたち波いうじうめでこうしと泪(なみだ)おもしかり。流(源)
色りき給云の葉をひやるべしかく世をうるまべき
身ともひたまへらましかば、おるじうハ思ひ望
えまし抱をなどるんづれぐる心ほそきまりる
いせ(源)べの波のうへうぐなぶまもうきめはら
うでのうまましまれを
わまがつむちすげきの中ま志ほされていつま
ですまれ海とちがめん。きそしさをんこれいつとも
待しぬこそづきをぬゆらし待れるとぞありけり。
かやうはいづてまもなほつるりしず笑しかたし

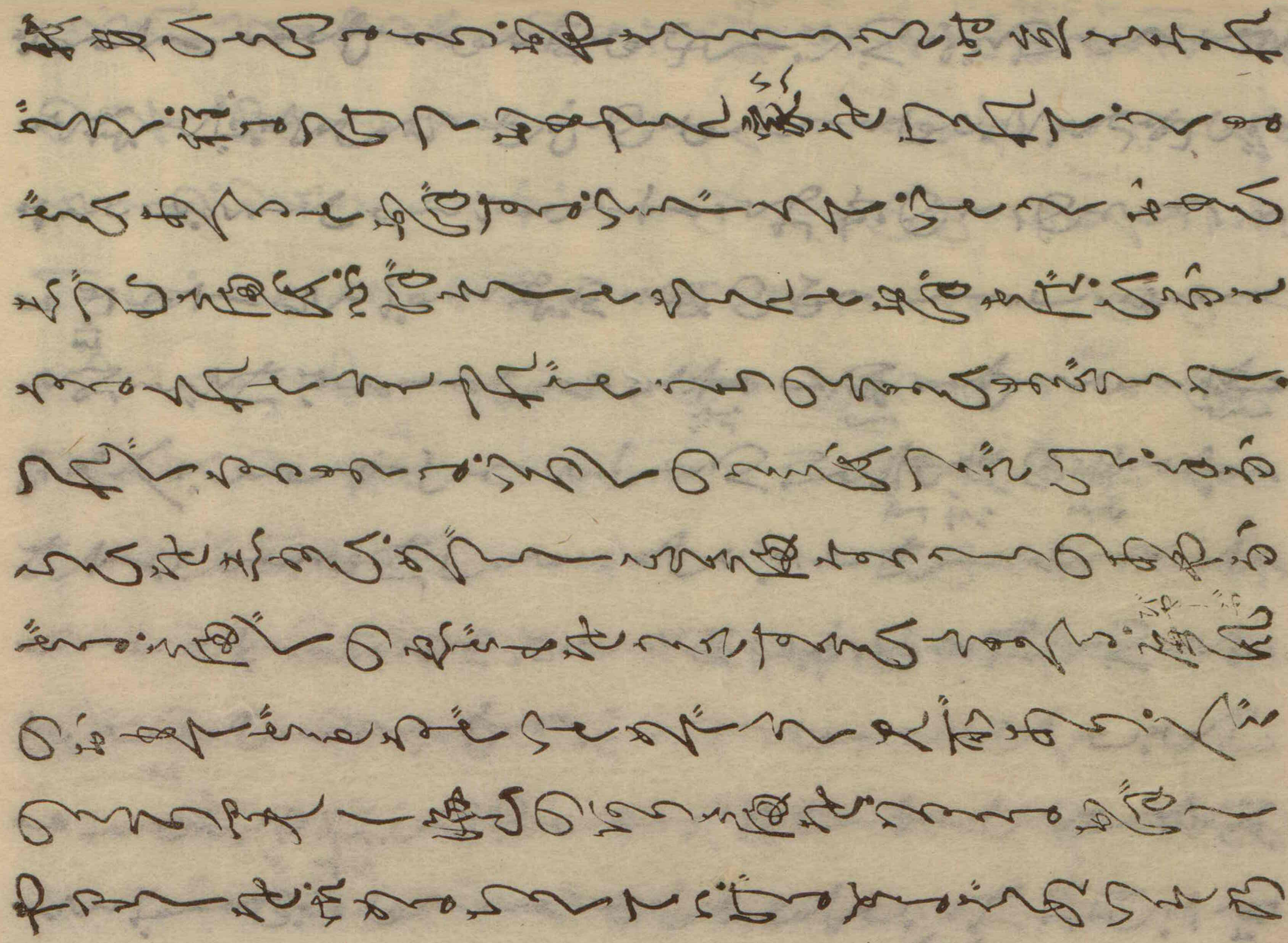
給蒙ちる室もうるしとおぼしけるまゝまゐ(添ふ)さ
あつめ給ける此心ぐしのふるおかしきもめちれ
ぬ心ちしていづれもうちしのひつるぐさあら
いまれはまひのまゝほしぐさたあり
あれまゝる(花ちる)行(のき)の志のぶなるがあつしげく
も家のかる袖かれどあるべけ(添ふ)るむぐらのかれ
のうしろしもるまゝ夜まておたすんと思し
やつまてなるが夜まつつぢ所ぐらづれてなぐしさて
あへい京のけいしの絲(もと)を作つくしてぢうき國(ミ)
國(ぐ)の此(ミ)庄(しやう)のまれなどまゝほさをてつうまつる
べきよしの給ひ

勝
んの君は人にしたしうしたしかりけるを。
左右ん
おとゞいとなりしたる給君にてをちにこ(恵)やにもり。
清門
うちにもそうし給ければ恨(うぎり)ある女にこやせ前も
かたをず。おほやけざ海のこやつへと言しかをり。
まるにれまくりしゆへとそいかめしきこともいで
こしがゆかされまて氣なべきにつけてもちぬ心に
たゞかしことのこそ衣に着て給けり。七月(勝)に成て
まつり給。いうじ(清門ん)りしれまひのるぞりたすれど。
人のそしりともたるしめされど。例のうへにつとさ
ふしもをまてゞうづに恨(うら)こゝかけは衣にちぎてせ
給。清門ノ清門さ海くちもいとたる海めりしうきたるれ

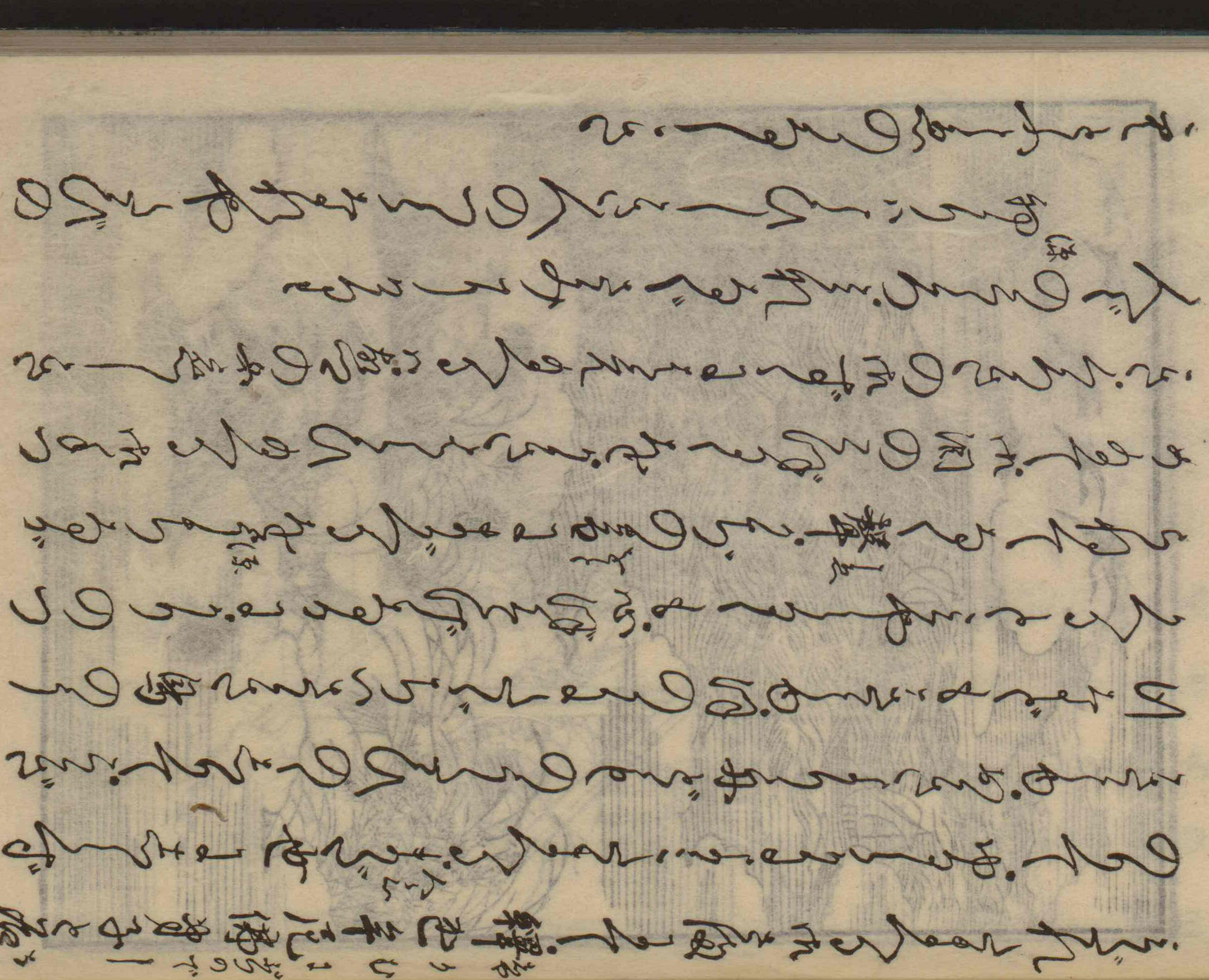
どこ(勝ん)せうことのこゝ(あ)ほうる心のうちぞうこじけるさ
れあそびのつゐでよ(江門祠)ぶれ人(ほこ)のるさこそいとさう
ぐしそれいかまましてさぬまふ人あほうらんなる
ごとまもひかりるさ心ちすうれとの給はそて院
のおぼしの給はせしれ心をこゞへつゝ所つゝうらん
りしとて泪ぐまをのまえ(勝)るんじ給ふず世中(江門祠)こ
そあるまつけてもおぢさるさ物ゐりそれとさひ
しるまくまゝ人さく世まあらんまれとるんさらまに
まんぬさもるりるんまいかぐあぼさるべきぢうさ程
の別にさひおとされんとそもそれいけるよると
しげるようしぬ人のいひをさけんといとるつしき

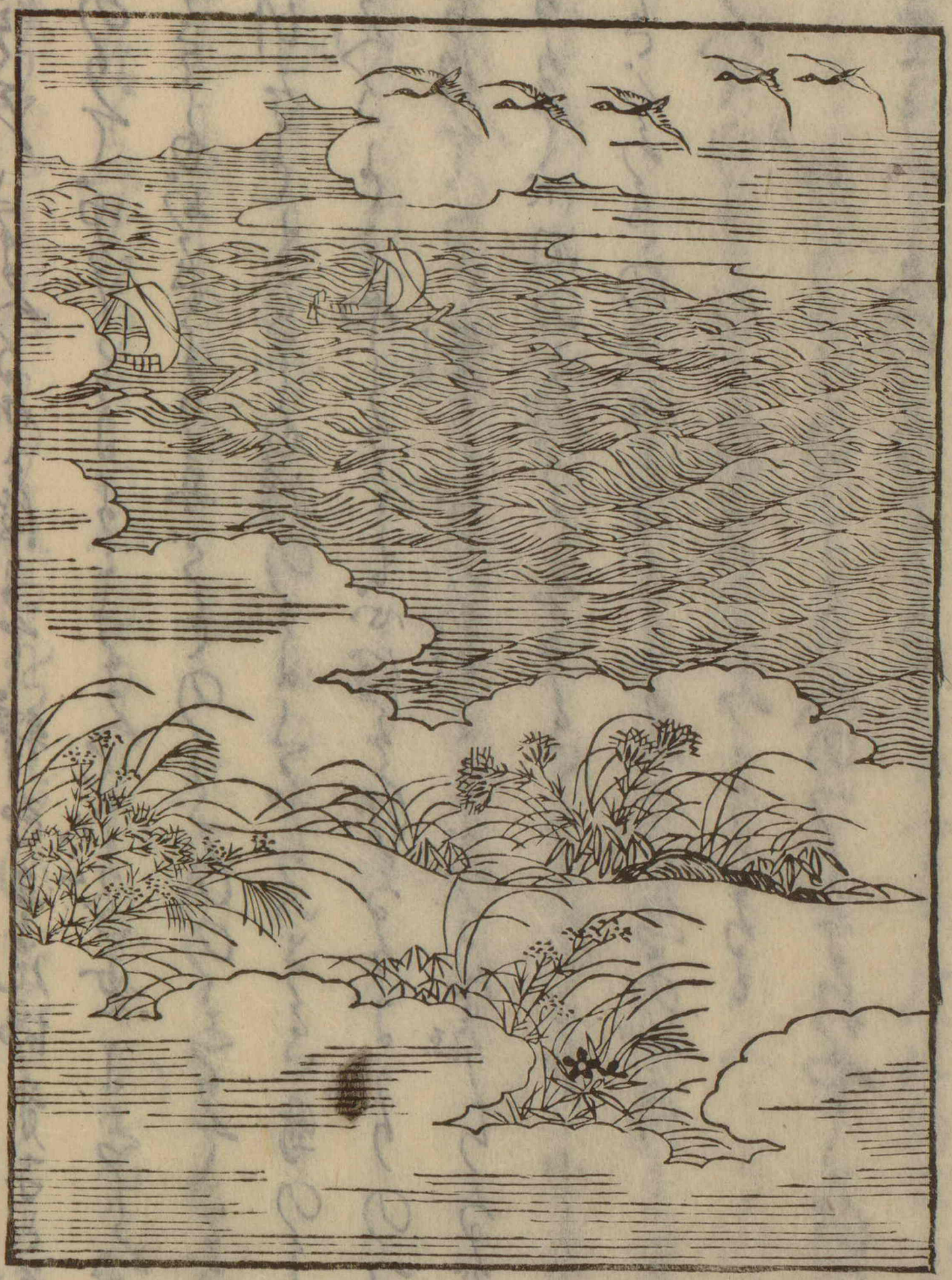
れこ海にそ、又海にかる哀と思へての給も
すつはつけてほろほろとこぼれいづればやいは
ねるおつるまでの給はすはゆるでさてちの家
みこそさうじくしされ春宮と院の給をもし侍
はせんどどうしあるともいづくらあれば心ぐるし
うちまぜ世はれこころのかなまもうちぢらす給
人々のあつまりけるされこころのつのき前なき給て。
いとおもしと思ふことも須磨にはいとゞ
心づくしの秋風に海はすこし遠けれど行平の
中納言の関ふきこゆるといひけんうらなみ
よるよるはげにいとちかくきこえて又なくあはれなる

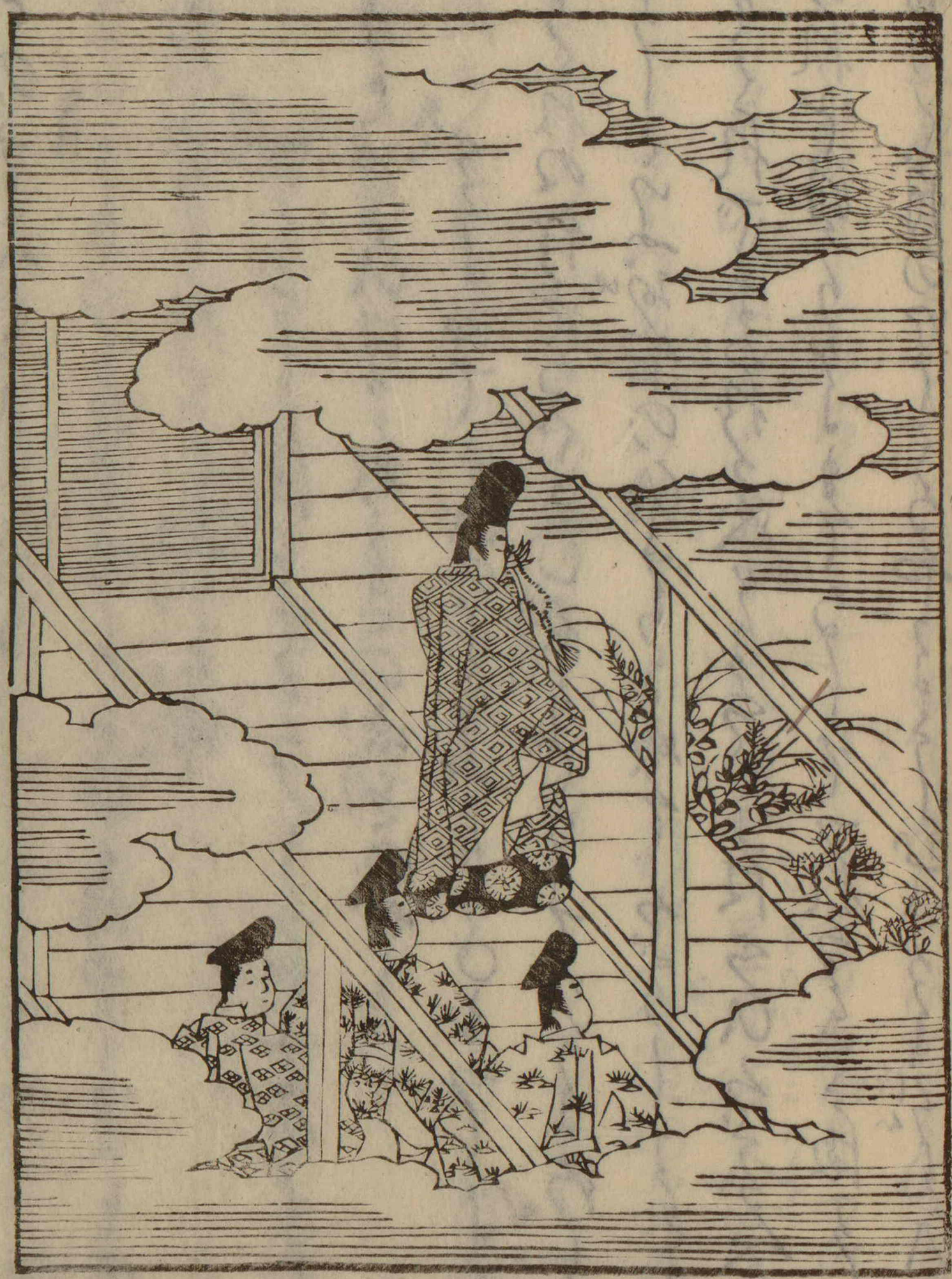
和ハかゝる前の新なりけり。此前にいと人ずくなる
てうちやすまいたれるに。ひ（源ん）とりめ此さまして。
枕をそばだてゝよりあしとさゝ給はるまゝに
こゝもとる立ゝる心ちしてなるべ御ともおぼし
ぬるまゝうくだりまゝりまゝり。琴（きん）をすゝし
うきなるしめるが我なるがいとすごうしきこと
ゆれバひさしめて
（源）
思ひてなくねまゝぶ渦波（うなみ）はしふかゝるより
ぜやかゝんとうるひめるまゝ人ごかどろきて。
めでたうおぼゆるまゝのぞれでおひなりおきね
ゝなる所思びやりまゝにつきげる（源ん）いかまゝらん。



ことずまねばなくなきあつめあつり。これ（ぐん）比乃上紙
ますめり。手枝（ちえだ）つ〇のりなどとめしてうくり思後
つうまつらをぐやと心もとなぐりあへりなり
りしうめでしきれなりさ後は世のもれせひにす
れてちうるれつうまつるとうれしきことにて
四丈人ばうりぞつとさつしひけり。前栽（せんざい）の草（ちな）多く
これこぞれおましろきり菅（ぐれ）は海（うみ）こやしらく廊（らう）
は出（深）めてしてずこ給ひ古後のゆくしうきから
なりはこころかしいましてこれ世のものともこ
え給ひずしろきあやのなまくなりしをん色など
まりてこまやかなりしおびしどけなくうち







とのゝまへぞよしこゝら

良清 りきつゝね芳のしとぞおもほゆりいその

よれ友ゐしねども民ア（えんぶのたゆ）左浦

惟光 心りしとしたばとてくるくりを雲のよそ

まもおもひけりれさきの右（うえ）をのぜう

茲人 とゝる出てさびの色とぶりゝもつゝり

とくれぬ程ぞるぐさむ友（茲人伺）まどりしていかゝ侍ら

ましといふ地やのひこちは此てくぐりしまとさ

そこれでまいれゝ此りしこゝはさひくぐるべゝ

めれど侍りゝまもてゐしてつれなきさ海まし

ありく月のいとゝるやゝさしむこゝるよ（添ん）ぞしひい

十五夜ありとおぼし出て。殿上のれあそびにひ
たく。前ぐそがめ給へんかしと。おもひやつ給はつけ
ても。月のかゝのこまもれ給。二子星外古人心と
すじこまへる。例の洞もとじめしれぞ。入道の交乃。
ありやへぐつかとの給ふをし。程いたんかゝるくこ
ひたく。おりくのことせひ出給ま。よくとなれ給。
夜かけ給ぬとなきゆれど。狂いりぬもず
みな御どぞたぐ。ちぐさむめぐりあひん月の
都ハしかゝるれども。そのようへのいとなりしう。
昔抱ぐりなぐたる給しれさ海の院まくこそまろ
里給へりしも。逆しくせひ出たてしまて。思賜

の此夜(ぞよい)ハ今ろくまありとすじつ入まぬれぞよ。ま
とよ身ちなくぶくらくらくまとさまへり
添
うしとのこひとへ抱ハおもほしでひぶる
みぎまもめるく袖なかそれころ犬(五節が父之)気ハのぶりけり(洗くしらりと)
いかめしうないひろくむとめがちくて不をうけ
れど小(きさ)のくハ毎までのぼる海づくひませう
えうしけくくるまほりくりおもしろきつくられ
ば心とまるまだ持くておもすくさけばあひるうす
いろつきむとめたちは毎のうちさへとづくしう
心げきうとろまして五をちのきこいづるそひさ
すぐるもにおしさまさんの声(上云)ぬまけきそくら

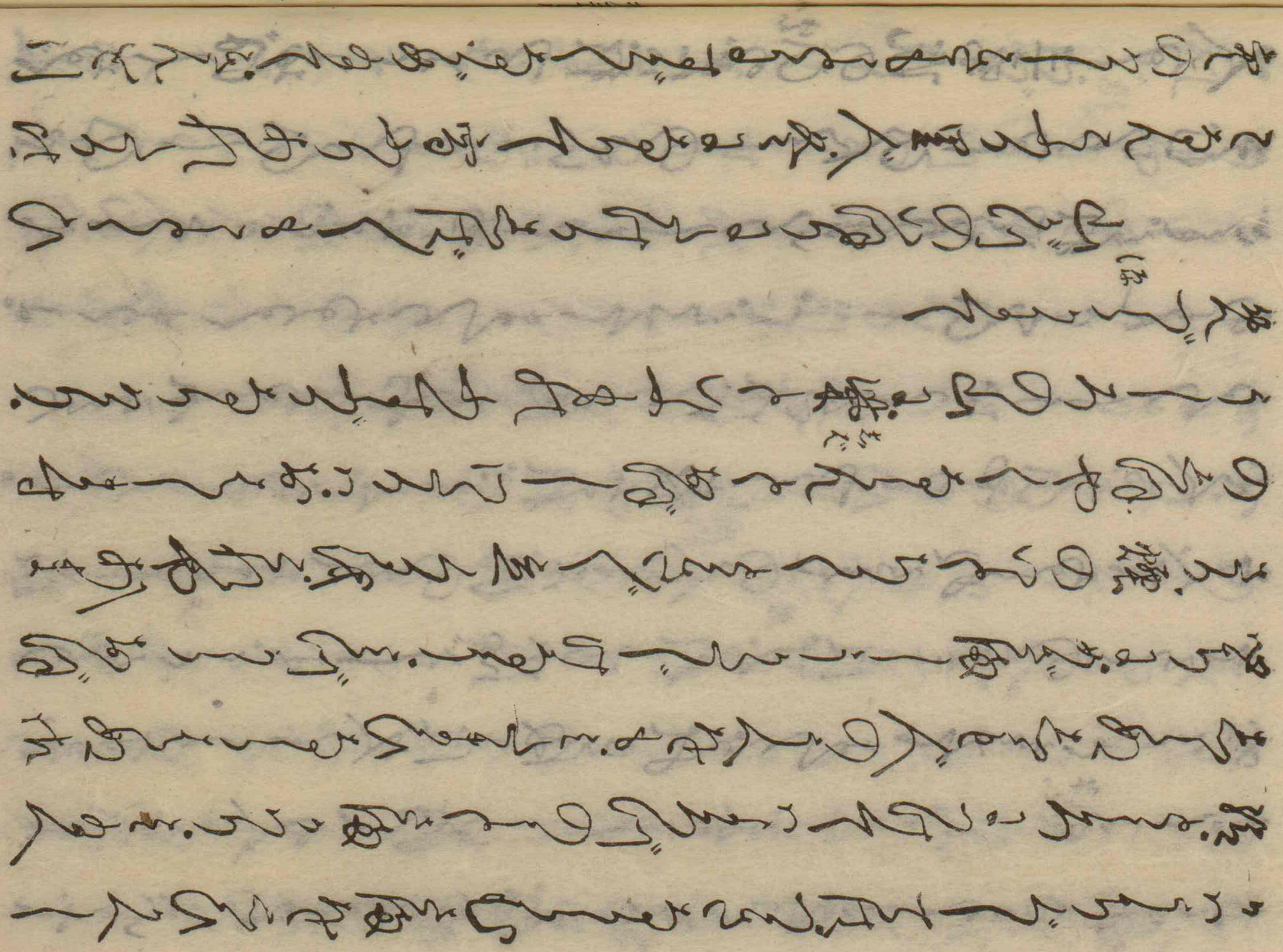
なまさとゆかまどころの三夜人の此ほど。他の子の
心ばそさうりあげめ。心あかりぶりこれなきまかり。
大貳 そちらはせうそこ罪そしたり。いと（詞）くちうかるほどより
夜かりのぶりてもまづいつしかさふらひて。姫の此
物語（ものぐり）もとこそ出ぬへ侍られ。御まひのかまかくこく
おりしましけるはやどりをまかりを侍るうたじけか
くるしうも侍れ。あひたりて侍る人ぞ。さるべき
これかれまできむかひてあまた侍れば前をさへ
思ぬへもぐかり侍ることだ侍りて。えさふらはぬこと。
ことさしくまかり侍らんたまど罪そしたり。これ（大貳の子と）ちく
どんのうえぞまいれる。此（係）との蔵人まなし。かへり

ゑ給ひし人をれば、いと（執おん）まれがるし、いとじとせんぞも。
又ゑる人ぞのあれば、ゑるしとせひて、しぞしまうち
とぞまし手、姫（源詞）ゑるれて後、せうしまうしりし
人ぞ、おひゑることゝうのゑるりまゑるり、りく
ワぎと立ゑりまれしゑることとのおふ、ゆゑりもさ
やうまるん、りゑ（執おん）るくくりて、おとすゑれ有き後
ゑるり、そち（大式）ゑりちじめ、むゝへの人ぞまがく
しうるさゑちゑり、又（せち）節はさくしてゑるし
ゑり
琴（みせち）の音（ね）まひさとめゑるくつるてなはゑゆ
ゑふ心意しるしめや、すゑさぐくしさも人なとがめ

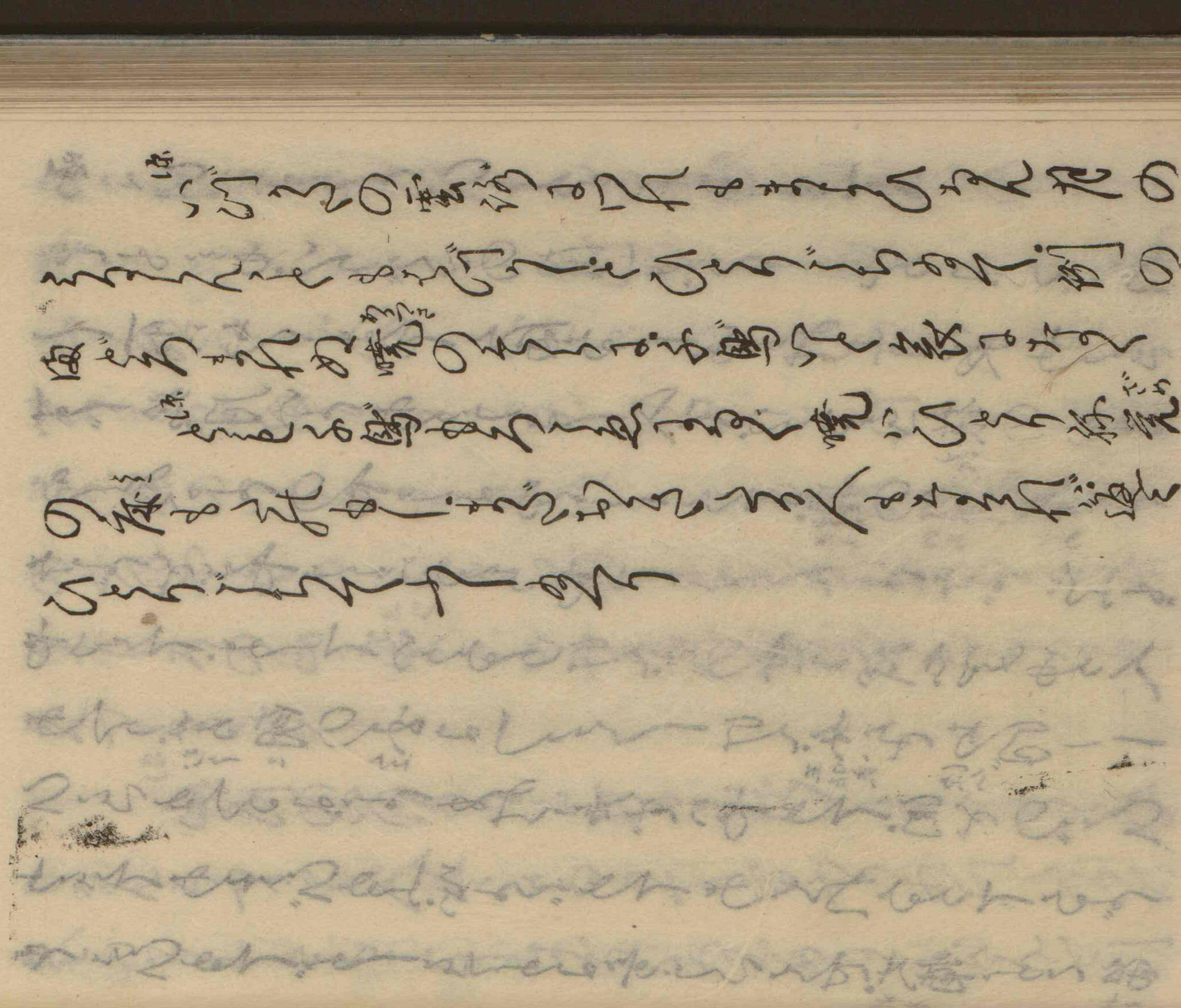
そと罪しとり。(源)ゆくさきて三路いとゝづくしげるり
心(源)ありてひくそのつゝみのゝゆゑはぐうちゐ
ましやすまれうゝるゝ。いさりをんとはあまはざる
しはやとあり。(地)むまやのあるゝ(口詩)しとしすう
人(菅相)もまけるゝまして。あらとまりぬべくるんあぼし
けるゝやこゝは月日すづるまゝ。みどをとゞ
めてまつりて。こひきゝもありふしあはりを。
去家ハまして。つねにあぼしいでつゝ。志のびてるさ
あふをこゝてまつりれめれと。まして。命婦の君し。
いとじう衰にこゝてまつる。(古)八道の家ハ。去家乃所
ことをゆくしりのゝあぼしくに。(源)大将もりくさて

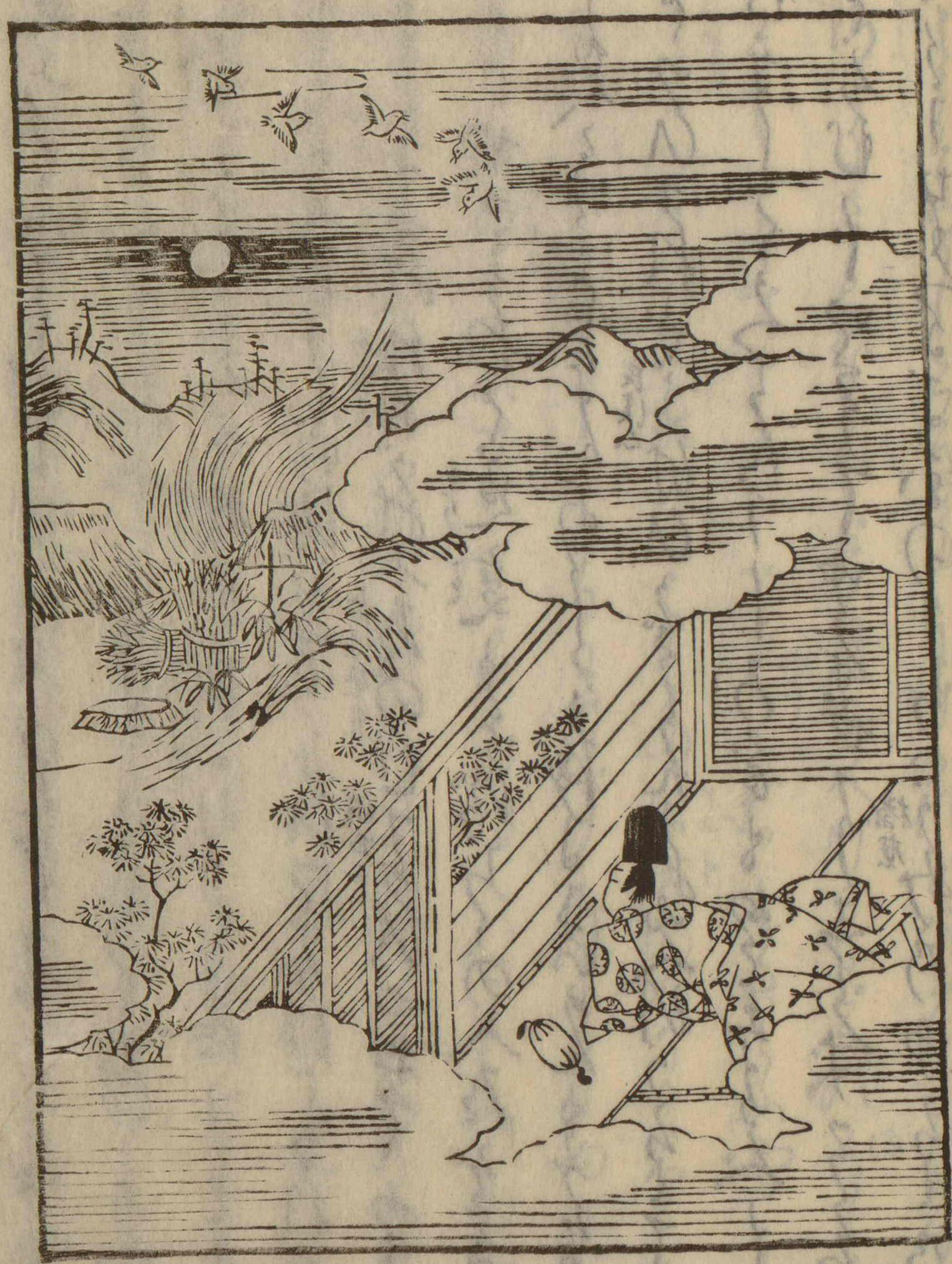
らん始めは代いらじうおぼしろげる。れたらう
のみこころむつましうこそして給しかんごちめ
なぐさじめつるはとふしひきて給るぐありき。
衰なる文をつくりかくしそれまつけても世中に
のこめでられぬ人ばさ(熱)さいのこやこそしめして。
いらじくのあひかり。(悪詞)おぼやけのうじなる人も。
心にまかせてこれ世のあぢきひをざこまうこと
かうしそあるれおもしろき家ゐまて世中と
そしつせもどきて。これまつ代馬といひかん人のひが
めるやうにいきうすうなど。何しきことぐもと罪し
それぞ。ひづらしそしてせうそこ罪しおふ

人なし。二条院のひめ（法）ぎんは。程ゆうまくはぼしなぐ
さむおりなし。ひんがしのこいはさふらひしひと
どもこれつゝりまいりしもじめはなすどうさしも
あらんとさひしうど。こゝそまつりなるくまくは。
なつゝしうおかしきれなりさ庵。まあやうなれこゝろ
ぢへもさひやつもゆうう衣なれば。まんでちうもなし。
なすべてなしめこゝろの人ごはは。ほのこしなどし給
そこゝろのなりは。すぐれたれ心ざしも。こゝくり
吹かりとこゝそまつう。これも庵には。久しうなる
まくはえ（深い）ゆんじすぐすまじうおぼしめんど。我身
ごはあさましこゝすくせとおぼゆうすまゐはいうで



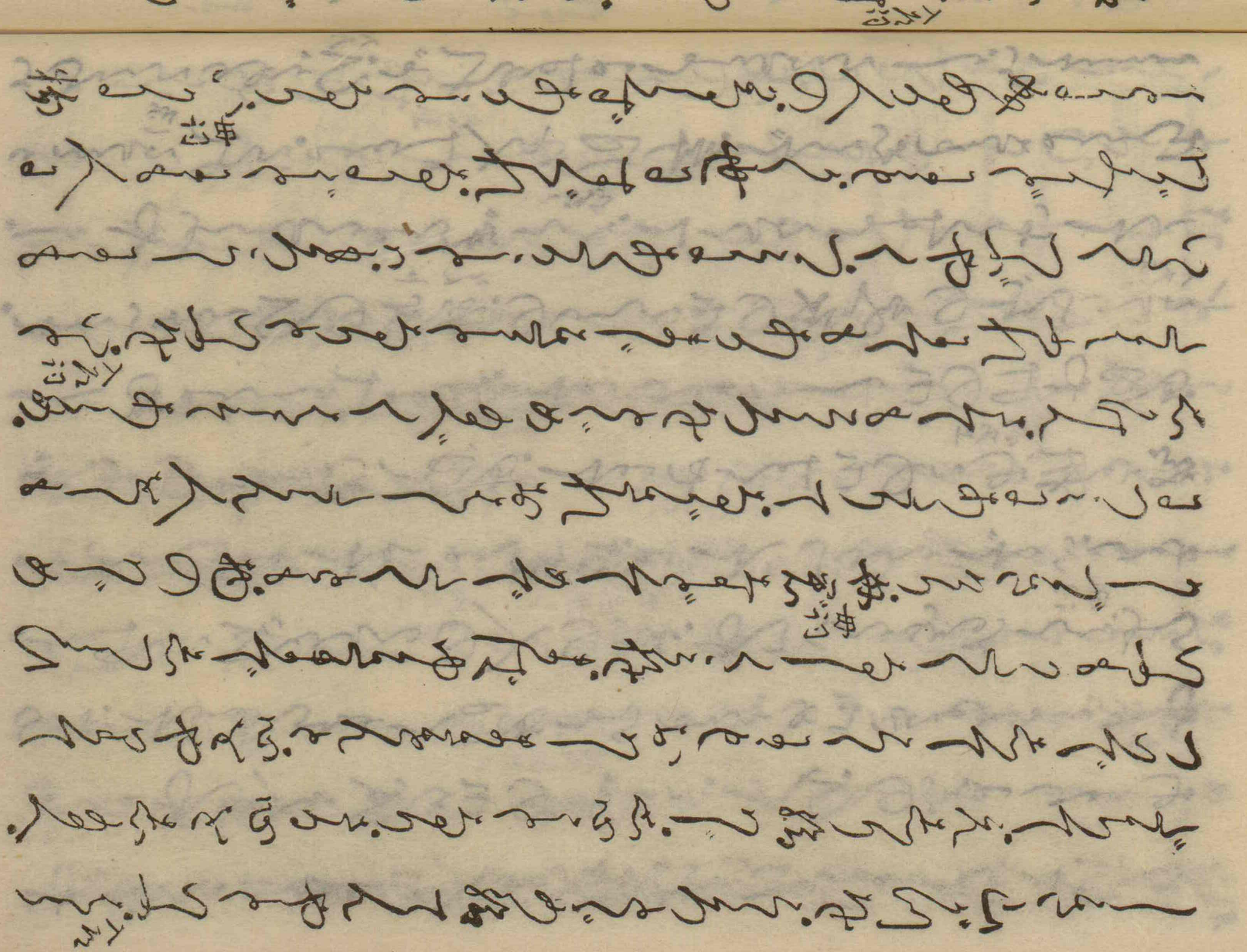
そさひまてうしきまゝ奇うこそせ。犬（雅光）捕ふこ笛（ザ元）
かさてあそびまふ心とゞめてあれなりてなど
ひきまつるまことも此声ぞハやめて。潤とのがひ
あり。芳（むくこ）胡の（くさ）まつきしけん。女（王昭玄）をあ（深ム）ばーー
やつとて。まして。いかるりけん。この世に我心字ゆり人
などをさやうにハなちやつとさんことなどこふも。
あぬことのやうにゆくしくて。霜（ふし）の後（のち）の夢（かめ）と
すゞ給。月いとあうさしへて。いかるき猿（ぢ）のおま
し所ハおくまでく海なし。ゆれ上に夜かるき
宅もこゝゆ。いりがるの月すぞくこゆりまでこれ
西にしまりと。ひとりとどちまて





(法)夜かくれてうげまいりて。れもんぜなどさ給ふ。
めづらしこゝろしのやうにめでたくのみおぼしまへ
ど。えこゝろてまつり捨(すて)ぜ。家(私の撓不之)にあらさ海にすもえ
むざりかりおりしの海いたづらひにうほどなれば。
ましこゝろれ船(あかん)にれ入(家播麼守)のむすめ(明石上)にしてゝ。かゝ
なとやつとかれど。夏(うつり)(と)もきぶちくの入道ぞさ
しゆへこゝろとなすん。おりしさ海にふめんもがな
といひかれど。うけひ(良清ふ)かざらんもれゆへひかりてて。
むなしくへんうしろぐもおてしまるべし
とらむじいうてゆるずせりしまうずうろ
いうなもへるに。玉のうちにうみ(播麼)乃ゆるも乃

まそいかしこさとますれど入名ひがめうろうろは
けるまさもむとで年月なんけるこれ添こそか
くておもすとこさくて奶名ノ君ぎるうふやう
入名詞さりつぼの文衣のれちらの源氏（えんじ）のひかる君こそ
あはやけのれしこまりまて すまれうるは地し
給なれ奶名上おこのれすくせまて あばしぬことのあふ
なりいかでかうついでは此君ましてまけんと
いふ母詞ぢくなかるいやや京の人のうるはしけど
やんごとなきれめどもいと思はくもちあつてその
おまりは志のびくことのれめ代さんあやまち
あひてかくもさはがれ給なる人はまきまうくあや

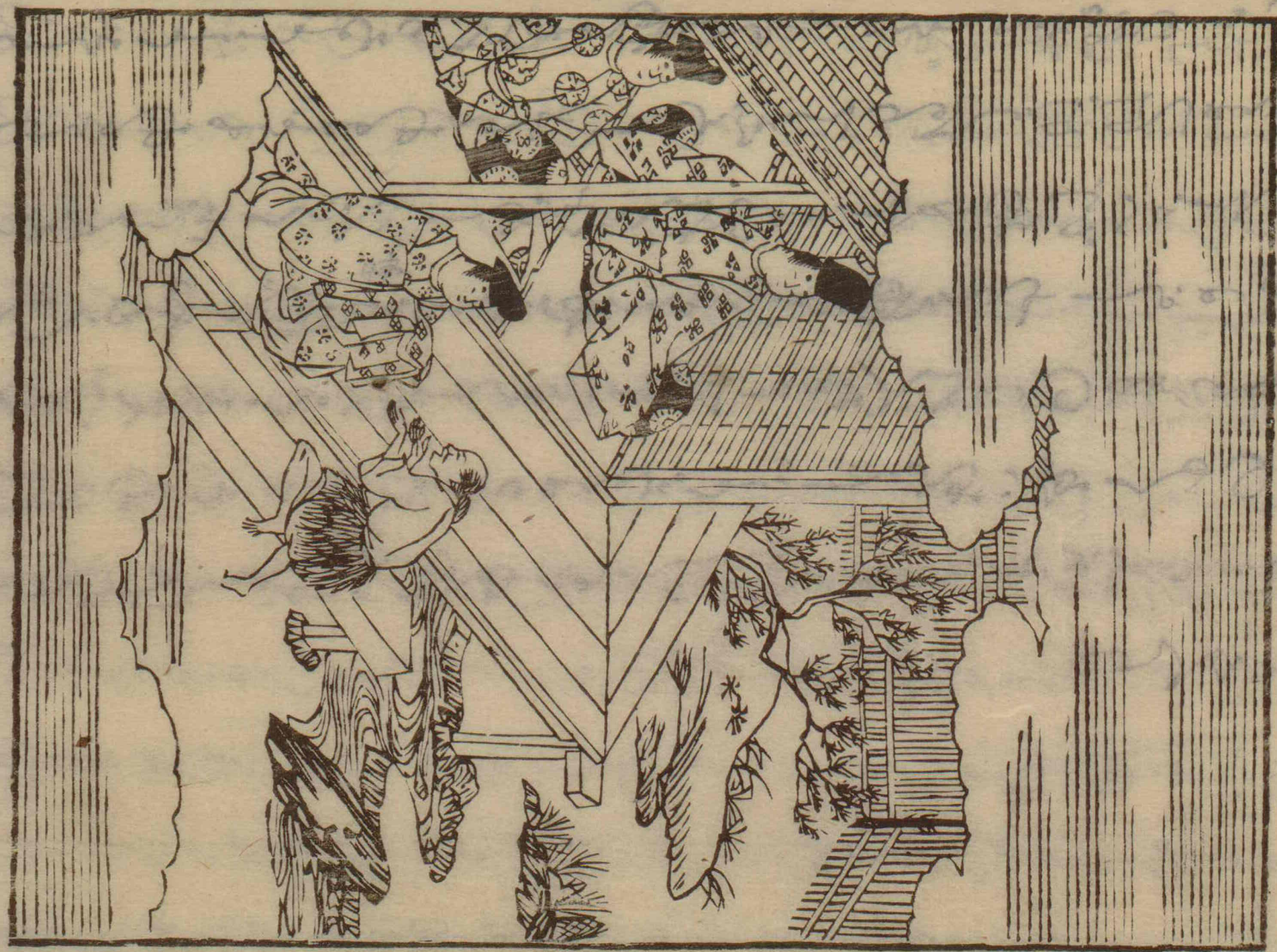


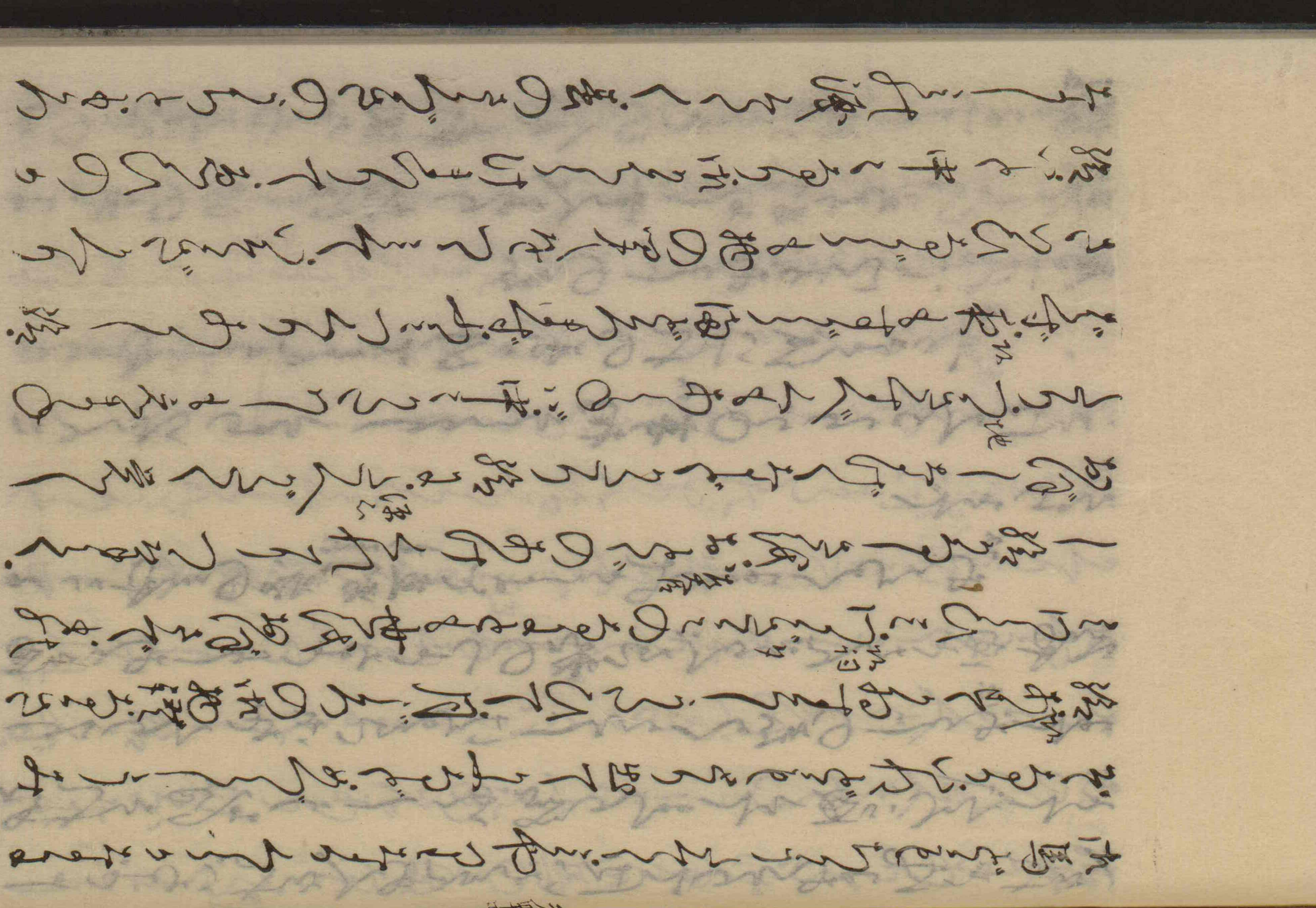
し給ふそぞけ（入名詞）ぐこやさ家ハをのかおぢる地し
ゆひし按（あ）家（ぜちの）大納言のこむとめるりいとかう
さくるる名をうりてこやづくるに出しゆくりし
ようくワうすぐれてときめし給ことなるひ
なりける程に人のそれこゝ得くてうせ給ふし
うどこれ（源）君のとまりゆくるいとめでたしうく兵ハ
心をこうくつゝみべきゆれなりをのれかゝる中
人なりとて御しまそじなどいひねたりしむ（地）（昭君）を
めすぐれたるたちなるれどなつしうあてたる
ころぞもあるさ海なるどぞげるやむごとなき人に
ゆとりまじかりけるこれ（昭君）ありさ海をくらかしき

まれにおもひしりてこうき人はこれをなるのみず
まもおぼさじ。ほどにつけたる世をばさしらぬこじ。
命なるべくておもふ人ごまとられるべ。何まもなり
なん。海(うみ)のそこにも入なんなどぞ思けるぢ(入合)ぞこ不
きくさひしづきて。年ゝ二たび経(すこ)吉(よし)ましまうで
させり。神のれしるしをぞ人しれぞこのこさひ
けり。すまは年(係木六才)ふりて日をすぐつれぐなるゝ。
うへし若(ほう)木の桜ほのかにさきてめてそこら乃
気色うらくなるゝ。よろづ(係ん)のことおぼし出されて。
うちなき給おりくおほゆ。二月廿日あまりいまし
年家をわれし時心ぐるしうし人ぐのはちり

きゝあなどいとこひしく南殿のさくらハ盗(さくり)まゝなり
ぬらん一年の菜のえんに院のれかしきこうちの
うへのいとこたちにまゝ海めいてけぶつくわるゝ後
すぐ給しもぶいでこさこそ給
深いのとなく大安人の意しきまさくらうぎ
志くかふまきまゝかりいとつれぐなるゝ大夏の三位(中)
中将も今ハ宰相まゝりて人がらのいとよけれど
時世のおぼしおもくてもれしぬへど世中いと衰ま
あぢきなくものゝおりごとに悪しく覚(おぼ)えまゝへバ
ことのさこそありてつゝるあるゝともいかぐとも
きんとおぼし此てぶはまゝまうで給うちうゝより

めづらしく入れしきよもひとろ泪ぞこぼれそるか
すまねしまへるき海いたんくるくらめきこう
一面のき海恵まりきうんやうあるは行ある恒
志ひこして石のもしら松のくしらとろそうる抱
りらめづらうるおかしやまが行めきてゆし色の
きがちるるはなをよびのうざぬさしぬきうち
やつれてしきしるいたまりびもてるしまるしも
いしじうこうる恵まれてしきよらるりどりつひ給
へるでうどもがりそめよまるしておまし所もあら
るこいれらこすぐろくのたんでうどうざの
ぐしまじぬ中ひぎるまるしてもんぜのぐきるひ



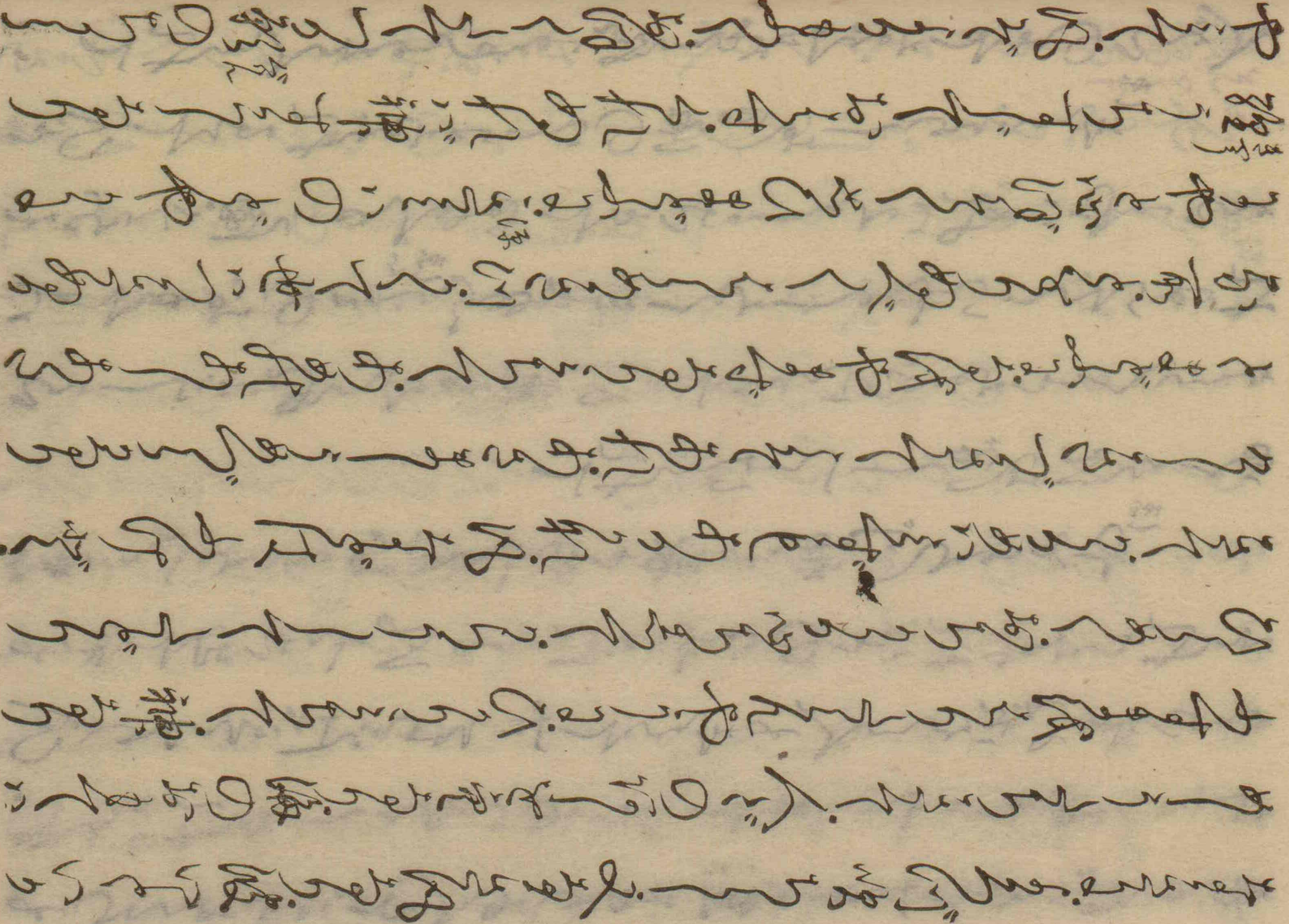


聲(ほ)まずじ給はともの人ぞこれ泪をるがすをのが
ぎてそいかなる別なし世べあり。新ばしけの事は。
為つれてはるあるじの君
ふるさと(ほ)代いづれの春かりてこんうしやまし
さはなるかりがね。宰相(は)さしかりしたちいぞんこ
ろちをで
あるくまかりれとしよを立別(きこれ)家のこやこは
為や海どもんさるべき都のつとなどよしあるさ海
まておるじ(ほ)の君かくかうじけるさはをくりり
とてふろご海とてまつり給ゆくしうおぼされぬ
べかれど此はあるりてはいぞえぬべかれバるどや

給世まありがるげるり此馬のさ海ありがるこそ形見
志のびぬへとて いうじきふえの名ありけるなど
ぞうり人とがめいべきことはいうこそまえし給ふず
日やうくさしあがりて江ちああそくしかれば
うりこのこ志いく出ぬふを源をくり給氣多いと中
こなりいい句まるたいあん給ふしんとすらんさりと
もくてやとと給まあるじ
源雲ちくとびふらげも更まえる我は其日
のくもりるきもぞうつはしれまれちがらく成ぬる
人はむしのりしさきへぐるぞうぐしう世は
又まじらふことくうく給かればいいかうやこのさうひ

をさまらんとあらんとおもひ侍るめるなどの給ふ宰相
（以）たづがなき雲井にひとりねをぞなくつばさ
ならべし友を恋つゝ（以詞）かたじけなくなれきこえて侍て
いとしもとくやしうおもふたまへらるゝおりおほく
などしめやかにもあらでかへり給ぬる（源）なごりいとゞか
なしうながめくらし給やよひのついたちにいで
きたるみのひけふなんかくおぼすことある人は
みそぎし給べきとなまさかしき人のきこゆれば
（源）海づらもゆかしうて出給ふいとおろそかにぜん
じやうばかりを引めぐらしてこのくにゝかよひける
（をんやうじ）陰陽師めしてはらへさせ給舟にことごとしき

人がこのきてながすなと給ふもよそへられて
源 志しらざりしおほ海のいらなるがれきてひと
るまやいまはいなるしきとてぬぬへるさ海さるかも
れまいでいつかしなくこしぬふ源 うこのおもてい
うらくとなるぎいたりて。川来もしらぬまうしる
ゆくさ紀おぼしつゞけられて
源 やをよろづ神も衣をしぬんおかをりつゝ恋
それとなれバどのぬふまはかま凡ふさ出て宅も
うき蓍ぬ代をしへもしてずたちさはぎたり。ひ
ちがき海とかゝりきて。いとあはしくしかれバこれ
ゆり給いんとするに笠(りさ)もとりあへぞさうちろも



なるべし。今志だしうくぶるあらば波にひれて
入ぬべかりけり。しろ塩（志ほ）といふものになんとりあへず。
人そこになまるくとはさけどいとかうことはまぶ
志ぶといひあへり。曉まこれうちやすこしうち。君も
いさくか孫いりぬへれば。それを海ともこしぬひとき
てなどこやよりめしあるにはまいり給ぬとて。
たどりありくとこるにおどろ（源）きてざはうこの中の
龍王（りうわう）のいといたう抱めでするものまてこいれたう
なりけりとおぼするいとものむつしうこれを海
ぬしへがくくおぼしなり也

69038
6AP75